

# 桑原遺跡5次調査地

2004

松山市教育委員会

財団法人松山市生涯学習振興財団

埋蔵文化財センター

くわばら

# 桑原遺跡 5次調査地



2004

松山市教育委員会

財團法人松山市生涯學習振興財團

埋蔵文化財センター

巻頭図版 1



調査地（東より）



S R 8 出土木製品

## 序

松山市の所在する松山平野は、西を瀬戸内海の斎灘・伊予灘に面した県下最大の沖積平野です。

松山平野では、古くは旧石器時代後期～縄文時代草創期の頃より人々が生活した痕跡がみつかっており、一部の時期を除いて現代に至るまで継続して土地利用が行われたことが分かっています。

遺跡から出土する遺物には木製品、石製品、土製品、金属製品など様々な材質のものがあります。そのうち木製品は、多く生産されていたにもかかわらず腐敗しやすいことから発掘調査によって出土することは非常にまれです。

今回調査を実施した桑原遺跡5次調査地では、幸運にも古墳時代後期ころの木製品を良好な状態で得られることができました。また、それらの中には丁寧な加工が施された齧串や、ヒョウタンと竹を組み合せて作られた杓子状木製品など大変貴重なものが含まれております。

このような成果をあげることができましたのも、関係者各位の皆さまの埋蔵文化財に対する深いご理解とご協力のたまものであり、厚く御礼を申し上げます。

松山市内には、我々の知らない貴重な遺跡が数多くのござれていると考えられます。

今後とも埋蔵文化財の保護ならびに発掘調査に対する一層のご理解とご協力の程、よろしくお願い申し上げます。

本書が埋蔵文化財の調査・研究の糧となり、ひいては文化財保護・教育文化の向上に寄与できることを願っております。

平成16年3月31日

財團法人松山市生涯学習振興財団  
理事長 中村時広

## 例　　言

1. 本書は、松山市教育委員会、財団法人松山市生涯学者振興財团埋蔵文化財センターが、平成13年4月6日から同年8月31日にかけて「桑原集会所及び公園建設」に伴い、松山市桑原5丁目688-1・3、687-4・5において実施した埋蔵文化財発掘調査の成果報告書である。
2. 本書に使用した方位は真北で、調査に伴う基準点の設置は国際航業株式会社に委託した。
3. S R 8より出土したヒヨウタン製杓子状木製品は、財団法人元興寺文化財研究所にP E G含浸法による保存処理および樹種の同定を委託した。
4. 調査地より出土した木製品のうち数点に関しては、株式会社古環境研究所に樹種同定を委託し、その成果を「第V章 自然科学分析」に掲載した。
5. 遺構の実測は、発掘担当調査員および栗林和孝、保島秀幸、峯本幸代、広田美知子、忽那理恵、福見哲知が担当し、遺物の実測図および製図は担当調査員および山本健一の指示のもとに丹生谷道代、築山知子、矢野久了、多知川富美子、村上真由美、木下奈緒美、岩木美穂が担当した。
6. 現場における記録写真は、調査員及び大西朋子がおこない、遺物撮影は大西朋子がおこなった。
7. 本書に関する遺物および記録類は、松山市立埋蔵文化財センターに収蔵・保管されている。
8. 本書の執筆・編集は吉岡和哉がおこなった。

# 本文目次

第Ⅰ章 はじめに	
1. 調査に至る経緯	1
2. 調査刊行組織	1~2
第Ⅱ章 遺跡の位置と環境	
1. 遺跡の位置	3
2. 環境	3~6
第Ⅲ章 調査の概要	
1. 調査の経過	7~8
2. 調査地の土層	10
第Ⅳ章 遺構と遺物	
1. 弥生時代～古代	
自然流路 SR 7	13~24
〔第1段階〕出土遺物 (1) 土器 (2) 石器・玉類 (3) 木製品・植物遺体・獸骨	
〔第2段階〕出土遺物	
自然流路 SR 8	27~35
〔第1段階〕出土遺物 (1) 土器 (2) 石器 (3) 木製品・植物遺体・獸骨	
〔第2段階〕出土遺物 (1) 土器 (2) 鉄器・石器 (3) 木製品	
溝 SD 3 出土遺物 (1) 土器 (2) 木製品	35
2. 中世～近世	
掘立柱建物跡 捜立 1 出土遺物	36
掘立柱建物跡 捜立 2 出土遺物	36
掘立柱建物跡 捜立 3	36~39
掘立柱建物跡 捜立 4	40
溝 SD 1 出土遺物	41~43
溝 SD 2 出土遺物	43
自然流路 SR 1	43
自然流路 SR 2	43
自然流路 SR 3 出土遺物	43
自然流路 SR 4	43~44
自然流路 SR 5	44
土坑 SK 1 出土遺物	44~45
粘土探掘坑 採掘坑 1 出土遺物	45
粘土探掘坑 採掘坑 2	45
3. 表上および包含層出土遺物	46~48
第Ⅴ章 自然科学分析	
1. はじめに	49
2. 試料	49
3. 方法	49
4. 結果	49~52
5. 所見	52
第Ⅵ章 調査の成果と課題	58

## 挿図・表目次

第1図 周辺遺跡分布図 (S = 1 : 25,000) .....	4
第2図 遺構配図 (S = 1 : 200) .....	9
第3図 調査区土層図 (S = 1 : 60) .....	11~12
第4図 S R 7 出土遺物 (1) 土器 .....	15
第5図 S R 7 出土遺物 (2) 土器 .....	17
第6図 S R 7 出土遺物 (3) 土器 .....	19
第7図 S R 7 出土遺物 (4) 石器・玉類 .....	21
第8図 S R 7 出土遺物 (5) 木製品 .....	22
第9図 S R 7 出土遺物 (6) 木製品 .....	23
第10図 S R 7 出土遺物 (7) 上器 .....	24
第11図 S R 7 測量図 (S = 1 : 80) .....	25~26
第12図 調査区東半部遺構測量図 (S = 1 : 80) .....	29~30
第13図 S R 8 出土遺物 (1) 土器 .....	31
第14図 S R 8 出土遺物 (2) 石器・鉄器 .....	32
第15図 S R 8 出土遺物 (3) 木製品 .....	33
第16図 S R 8 出土遺物 (4) 木製品 .....	34
第17図 S D 3 出土遺物 .....	35
第18図 調査区西半部遺構測量図 (S R 7 以外) (S = 1 : 80) .....	37~38
第19図 挖立 1 測量図 (S = 1 : 40) .....	39
第20図 挖立 2 測量図 (S = 1 : 40) .....	40
第21図 挖立 3 測量図 (S = 1 : 40) .....	41
第22図 挖立 4 測量図 (S = 1 : 40) .....	42
第23図 挖立 1・2、S D 1、S R 3、S K 1 出土遺物 .....	44
第24図 掘堀坑 1 出土遺物 .....	46
第25図 表上～包含層出土遺物 (1) 上器 .....	47
第26図 表上～包含層出土遺物 (2) 鉄器・石器 .....	48
第27図 桑原遺跡 5次調査の木材 I .....	54
第28図 桑原遺跡 5次調査の木材 II .....	55
第29図 桑原遺跡 5次調査の木材 III .....	56
第30図 桑原遺跡 5次調査の木材 IV .....	57
表 1 桑原遺跡 5次調査地出土木製品の樹種同定結果 .....	53

## 写真図版目次

巻頭図版 1 調査地（東より）

巻頭図版 2 S R 8 出土木製品

図版 1

調査前（西より） 調査前（東より） 調査地冠水状況（東より）

図版 2

作業風景・S D 3 にて（南西より） 作業風景・S R 7 にて（東より）  
作業風景・S R 8 にて（南東より）

図版 3

調査地より北東を望む  
遺構検出状況（東より）

図版 4

S R 7 完掘状況（北東より）  
S R 7 下層遺物出土状況（東より）

図版 5

S R 7 遺物出土状況 第9図83（南より）  
S R 7 遺物出土状況 第9図84ほか（南より）  
S R 7 遺物出土状況 第9図81（南より）

図版 6

S R 8・S D 3 検出状況（東より）  
S R 8・S D 3 完掘状況（東より）

図版 7

S R 8 完掘状況（北より）

図版 8

S R 8・S D 3 完掘状況（北東より）  
S R 8 下層堆積状況（南より）

図版9

- S R 8 遺物出土状況 第16図129（北西より）  
S R 8 遺物出土状況 第13図117・第16図128（南西より）  
S R 8 遺物出土状況 第16図128（南西より）

図版10

- S R 8 上層遺物出土状況（南より）  
掘立1・4 検出状況（東より）

図版11

- 掘立1・4 完掘状況（東より）  
S R 1・2・3 完掘状況（南東より）

図版12

- S D 1 完掘状況（北より） S D 1 遺物出土状況（南西より）  
掘立2 検出状況（北より）

図版13

- 掘立2 完掘状況（北より） 掘立2 遺物出土状況 S P11（北より）  
掘立2 遺物出土状況 S P13（北より）

図版14

- S R 7 出土木製品・植物遺体・獸骨

図版15

- S R 8 出土木製品①

図版16

- S R 8 出土木製品②

図版17

- S R 8 出土木製品③・植物遺体・獸骨、S D 3 出土木製品

# 第Ⅰ章 はじめに

## 1. 調査に至る経緯

平成13年1月15日、松山市生涯教育課育成係より松山市桑原5丁目688-1・3における埋蔵文化財の試掘・確認調査の申請が松山市教育委員会文化教育課（現、文化財課）に提出された。松山市道「中村～桑原線」道路新設に伴い、新築移転する「桑原集会所及び公園建設」に伴うもので、申請地は松山市の指定する埋蔵文化財包蔵地「No82 東本遺物包蔵地」内に所在する。

申請地の西側から北側にかけての地域は、東本遺跡4次調査地、同5次調査地、同6次調査地、桑原遺跡3次調査地など、弥生時代後期～古墳時代初頭にかけての遺跡が濃密に分布することで知られ、特に松山東部環状線の道路建設に伴う発掘調査の際には、東本遺跡4次調査地から弥生時代後期の周堤帯をもつ大型の竪穴式住居址、破鏡を有する竪穴式住居址などが検出されている。また申請地の東側は、破碎された須恵器と共に多量の滑石製臼杵が確認された桑原本郷遺跡や県指定史跡で古墳時代中期～後期の前方後円墳として知られる絆石山古墳、古墳時代後期初頭に造られた全長45.2mの前方後円墳で内部主体に排水溝を備えた片袖式の横穴式石室をもつ三島神社古墳（現在消滅）、溝および土坑内から13世紀代の土器を多量に出土している桑原遺跡2次調査地など、古墳時代および中世の集落や古墳が分布する地域として知られ、調査地周辺は市内でも有数の遺跡密集地帯である。

上記の事実をふまえた上、文化教育課は申請地における埋蔵文化財の有無を判断するために、平成13年2月2日（金）から6日（火）まで試掘調査を実施した。

試掘調査では生涯教育課職員の立ち会いのもとに申請地を確認し、合計3本のトレンチ（試掘溝）を設定して埋蔵文化財の確認調査を行った。その結果、3本のトレンチ全てにおいて弥生土器、土師器、須恵器などが遺構内より出土することを確認し、申請地内に少なくとも3条の溝状遺構及び1基の柱穴が存在することが判明した。

試掘調査の結果をうけ協議を重ねた結果、埋蔵文化財の存在する可能性の高い箇所（申請地の全域）に対して本格調査を実施する運びとなった。

## 2. 調査・刊行組織

本調査の調査・刊行組織は以下の通りである。

〔調査組織〕（平成13年8月31日現在）

松山市教育委員会	教育長	中矢 陽三
事務局	局長	大西 正氣
	次長	川口 岸雄
	企画官	一色 巧
文化財課	課長	馬場 洋
(財)松山市生涯学習振興財団	理事長	中村 時広
	事務局長	二宮 正昌
	事務局次長	江戸 孝

## はじめに

埋蔵文化財センター	事務局次長	森 和朋
	所 長	中川 隆
	専門監	野木 力
	調査係長	西尾 幸則
	調査員	栗田 茂敏 吉岡 和哉
		山本 健一（木製品担当） 大西 朋子（写真担当）

### 〔刊行組織〕（平成16年3月31日現在）

松山市教育委員会 事務局	教育長	中矢 陽三
	局 長	武井 正浩
	企画官	遠藤 宗敏
	企画官	石丸 修
	課 長	八木 方人
	主 幹	家久 則雄
(財)松山市生涯学習振興財團	副主幹	田城 武志
	副主幹	重松 佳久
	理事長	中村 時広
	事務局長	三宅 泰生
	事務局次長	菅 嘉見
	所 長	杉田 久憲
専門監兼学芸係長 次長兼調査係長 管理係長	高本 昌陽	
	西尾 幸則	
	岸本 照修	
	栗田 茂敏	
	吉岡 和哉	
	山本 健一（木製品担当） 大西 朋子（写真担当）	

## 第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

### 1. 遺跡の位置

桑原遺跡5次調査地は、松山市のシンボルである松山城の（東）南東、右手川を隔てた地域に広がる閑静な住宅街、松山市桑原5丁目688・1・3、687・4・5に所在する。

松山市は愛媛県のほぼ中央部、瀬戸内海に面して開けた県内最大の沖積平野「松山平野」の北部に位置する地方都市で、遺跡は松山市の中央部「桑原地区」に位置する。桑原地区は大部分が右手川によって形成された古期扇状地上に位置し、わずかに東側の一部が芝ヶ崎よりのびる丘陵及び低位段丘（下位砂礫台地）上に位置する。調査地はその北東部から南北方向に開析された右手川扇状地の扇央付近に位置し、海拔高度約34.4mを測る。

### 2. 環境

桑原遺跡5次調査地の所在する地域は古代温泉郡（伊予国風土記逸文の中では湯郡と記される）にあたると考えられ、郡内に聖德太子の米浴で知られる道後温泉を内包する。また当地域は、建武年間に豪族河野通盛が道後に湯築城を築いたことで政治経済の中心地となり、さらに慶長八年（1603年）加藤嘉明が勝山に松山城を築き、伊豫國の中心として栄え現在にいたる。

調査地は、郡内でも特に桑原郷に比定される地域に所在し、桑原郷は中世後期に河野氏の一門である桑原氏、松永氏、重水氏などが城館を構えていた地域として知られる。

これまで調査地周辺では、松山市東部環状線の道路建設工事や民間の宅地開発等に伴い、縄文時代から中世にかけての遺跡が多く調査され、貴重な成果が得られている。以下、時代を代表する主要遺跡の概略を述べる。

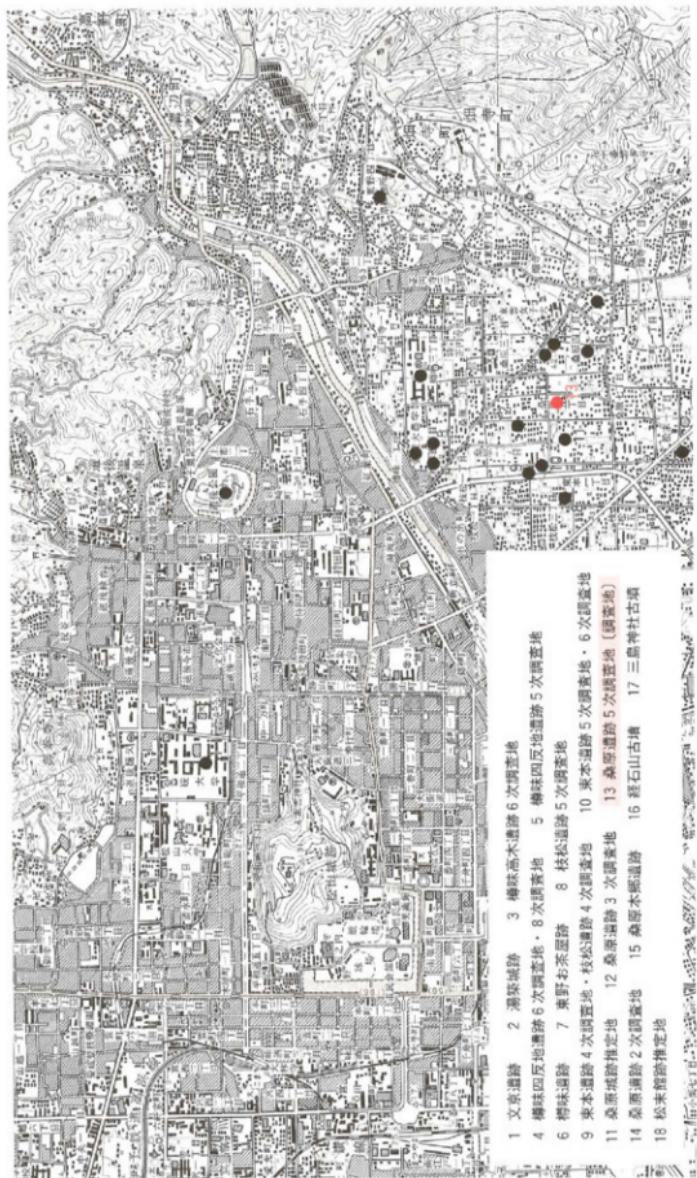
当地域は、松山市内でも確認例の稀有な縄文時代草創期から早期にかけての遺物および生活痕跡（焼土、柱穴）が調査されている地域である。

松山市東部環状線の道路建設工事に伴い実施された東本遺跡4次調査地の発掘調査では、ほぼ全域においてアカホヤ火山灰および、その下に2枚の間層をはさんでAT火山灰の堆積を確認している。ここで特筆されるのはアカホヤ火山灰内部よりサヌカイト製の石鎌、アカホヤ火山灰の直下より赤色珪質岩製のナイフ形石器、サヌカイト製およびチャート製の石鎌、サヌカイト製および姫島産黒曜石製のスクレイバー、貝岩製の槍先形尖頭器などが出土していることである。さらに、アカホヤ火山灰堆積以前に形成された遺構には時期差がみられることも判明しており、今後の調査方針を決定づける重要な成果が得られている。

弥生時代の遺跡に関しては、比較的豊富な資料が得られており、特に後期後半以降に遺跡数が急増することが判明している。

東部環状線の道路建設工事に伴って実施した東本遺跡4次調査地・枝松遺跡4次調査地などの調査では、後期から終末にかけての集落構造がある程度まで解明されており、報告者によると大型の円形竪穴式住居址を中心に大型・中型・小型の方形竪穴式住居址が集まるで拠点的な集落を構成していた可能性が高い。また、集落の中心的建物に破鏡の風習がみられることや、建物のなかにベッド状遺構を持つものが存在すること、副次的な炉を持つものが一定の割合でみられること、鉄器の保有が一般的にみられることなどが判明しており、集落研究に欠かすことのできない貴重な成果が得られている。

古墳時代に関しては、前期初頭ころに廃絶された豪族居館あるいは祭殿と考えられる建物およびそ

第1図 周辺遺跡分布図 ( $S = 1 : 25,000$ )

れに伴う可能性の高い溝、中期～後期初頭ころの集落跡などが学術的に調査された樽味四反地遺跡6次調査地および、隣接する土地で近年調査され、前期初頭に属する同規模の建物跡を確認した樽味四反地遺跡8次調査地を中心として多くの遺跡が調査されており、特に樽味地区を中心とした地域に集落関連遺跡の集中する傾向が見られる。

また桑原地区内には古墳時代中期～後期と推定される経石山古墳や、古墳時代後期初頭の三島神社古墳など、現在までのところ松山市内で十数基しか確認されていない前方後円墳が集中して榮かれており、古墳時代を通じて拠点的な地域であったことが窺える。

古代の遺跡に関しては報告例が少なく情報が限定されるが、樽味四反地遺跡5次調査地より7～8世紀頃の自然流路を検出し、その中より4点の陶器を出土しているほか、樽味四反地遺跡6次調査地より7世紀代の堅穴式住居址および古代の柱建物跡を検出している。

また近年調査が実施された樽味高木遺跡6次調査地では、8世紀代の段落ち遺構より鍛冶関連遺物（鉄滓、砥石、轍の羽口）が出土しており、今後の調査に期待するところが多い。

中世では、市道「中村～桑原線」の道路建設に伴い実施された桑原遺跡2次調査地において13世紀前半の区画溝と考えられる遺構を検出しているほか、愛媛大学農学部構内に位置する梅味遺跡において14～16世紀の集落関連遺構を検出しており、報告者は「複数の方形区画が連結した中世集落の姿」を想定している。

また、本項の最初に述べた通り、桑原郷は中世後期に河野氏の一門である桑原氏、松末氏、重水氏などが城郭を構えた地域であり、桑原城、松末館などは所在地がほぼ特定されているにも関わらず、これまでその周辺において、城館跡の存在を推定できるような調査成果は得られていない。

近世に至っても、中世に引き続いて集落が展開していたと考えられるが、近世遺跡に対する調査例が非常に乏しいため詳細は不明である。しかしながら、枝松遺跡5次調査地などの調査例に代表されるように、良質の粘土を求めて大規模な採掘行為が行われることが確認されており、当時の産業を考えるうえで非常に興味深い。

また、樽味高木遺跡2次調査地では、礫混じりの土をマウンド状に積み上げた塚を2基検出しており、五輪塔の一部と共に、埋葬に伴って実施されたと考えられる土師皿および銭貨を用いた祭祀の痕跡を確認している。

### 【参考文献】

- 1992 名古屋市博物館 「和名類聚抄」 名古屋市博物館資料叢書2
- 1980 松山市教育委員会 「松山市史料集 第1巻 考古編」
- 1987 松山市教育委員会 「松山市史料集 第2巻 考古編II」
- 1992 松山市史編集委員会 「松山市史 第1巻 自然 原始 古代 中世」 松山市役所
- 1986 愛媛県史編さん委員会 「愛媛県史 資料編考古」 愛媛県
- 1982 愛媛県史編さん委員会 「愛媛県史 原始・古代1」 愛媛県
- 1984 愛媛県史編さん委員会 「愛媛県史 古代II・中世」 愛媛県
- 1981 竹内理三 「38 愛媛県」 角川日本地名大辞典 角川書店
- 1990 下中直也 「愛媛県の地名」 日本歴史地名体系 第39巻 平凡社
- 1996 高尾和長ほか 「東本遺跡4次調査・枝松遺跡4次調査」 松山市文化財調査報告書 第54集
- 2003 小玉重紀子 「樽味四反地遺跡 一6次調査一 弥生時代～古墳時代初頭編」 松山市文化財調査報告書 第94集

- 2003 高尾和長・加島次郎 「平成15年度 市道柳味溝辺線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書(柳味四反地遺跡8次調査地、柳味高木遺跡7次調査地)」松山市教育委員会・財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
- 2002 栗田茂敏 「桑原本郷遺跡」「桑原地区の遺跡IV」 松山市文化財調査報告書 第86集
- 1997 田崎博之 「柳味遺跡III 一柳味遺跡3次調査報告一」 愛媛大学埋蔵文化財調査報告VI
- 1992 田城武志・大森一成 「経石山古墳」「桑原地区的遺跡」 松山市文化財調査報告書 第26集
- 1997 河野史知 「経石山古墳2次調査地」「桑原地区的遺跡III」 松山市文化財調査報告書 第58集
- 1972 森 光晴・長井歎秋ほか 「三島神社古墳」 松山市教育委員会 (松山市文化財調査報告書 第1集)
- 2002 高尾和長 「柳味四反地遺跡 5次調査一」 松山市文化財調査報告書 第87集
- 2002 河野史知 「柳味高木遺跡6次調査地調査概要報告書」 松山市教育委員会・財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
- 2001 相原浩二 「桑原遺跡2次調査地」「松山市埋蔵文化財調査年報12 平成11年度」
- 1989 宮本一夫 「鷹子・柳味遺跡の調査」 愛媛大学埋蔵文化財調査報告 I
- 1993 田崎博之 「柳味遺跡II 一柳味遺跡2次調査報告一」 愛媛大学埋蔵文化財調査報告IV
- 1987 愛媛県教育委員会文化振興局編 「愛媛県中世城館跡 一分布調査報告書一」
- 1984 愛媛県史編さん委員会編 「愛媛県史 古代II・中世」 愛媛県
- 1997 河野史知 「枝松遺跡5次調査地」「桑原地区的遺跡III」 松山市文化財調査報告書 第58集
- 1994 栗田正芳・河野史知 「柳味高木遺跡2次調査地」「桑原地区的遺跡II」 松山市文化財調査報告書 第46集

## 第Ⅲ章 調査の概要

### 1. 調査の経過

桑原遺跡5次調査地は、調査以前は水田として利用されており、所々に周囲から水を引き込む工夫がみられた。その為調査地内への浸水が著しく、調査を進行する上で非常に大きな障害となった。

以下に調査の経過を記す。

平成13年4月9日（月）

調査は調査地内に繁茂した雑草を除去する作業から開始した。

平成13年4月16日（月）

試掘結果をもとに調査区の設定を行い重機による掘削作業を行った。掘削作業は遺構上面に堆積した表土および包含層の除去を目的に実施し、地表面を掘り込まないように配慮しながら第Ⅰ層及び第Ⅱ層、第Ⅲ層、第Ⅳ層を平面的に順次取り除いていった。

平成13年4月25日（水）

包含層が充分に取り除かれていない部分に対して人力による掘削を行い、遺物を取り上げながら遺構の検出作業を行った。

平成13年5月7日（月）

連休中に雨が降り続いたことから調査区が水没し、水中ポンプを使用して水抜き作業を実施したが、作業の終了までに丸一日を要した。

平成13年5月8日（火）

流入する雨水を効率良く排出するために調査区北西部にトレンチを設定する。

平成13年5月11日（金）

高所作業車を使用して、東側から調査区内の遺構検出状況を撮影する（大西朋子調査員）。その後検出した遺構の測量を開始し、調査区内で最も新しい遺構（探査坑1）から順次、遺構の掘り下げ作業を開始する。

平成13年5月29日（火）

S D 1 遺物出土状況をカメラで撮影する。

平成13年5月31日（木）

S R 1～S R 5 の掘り下げを開始する。

平成13年6月8日（金）

S R 1～S R 5 の完掘状況をカメラで撮影し、S D 3 及びS R 8 の掘り下げ作業を開始する。

平成13年6月18日（月）

S R 7 の掘り下げ作業を開始する。

平成13年6月19日（火）

S R 8 の東岸を確認することを目的に、東側に向けて調査区を約1m拡張することに決定し、拡張作業を人力によって開始する。

平成13年6月20日（水）～21日（木）

降り続いた雨で調査区が冠水した為に水抜き作業を行う。

平成13年6月26日（火）

S R 7 上面で掘立柱建物跡（掘立2）を確認し、周囲の精査を開始する。

平成13年7月2日（月）

S R 7上面に掘り込まれるピットの検出状況をカメラによって撮影し、測量及び掘り下げ作業を開始する。

平成13年7月4日（水）

S R 7の上面において検出した遺構の完掘状況をカメラで撮影し、S R 7の掘り下げ作業を再開する。また、S R 8の下層から植物遺体（種子）が見られることを確認し、周辺土壤の採取を行う。

平成13年7月24日（火）

S R 7及びS R 8の掘り下げ作業を継続して実施し、土器や木製品などの出土状況を図面に測量する作業を開始する。

平成13年8月3日（金）

S R 8下層において布巾及び木鍤が出土。

平成13年8月8日（水）

遺跡全体の完掘状況を撮影する為に調査区全体の精査作業を開始する。

平成13年8月10日（金）

高所作業車を使用して遺跡の完掘状況をカメラで撮影する（大西朋子調査員）。

平成13年8月17日（金）

調査区全体の完掘平面図及び、調査区壁面の土層断面図の測量を開始する。

平成13年8月25日（土）

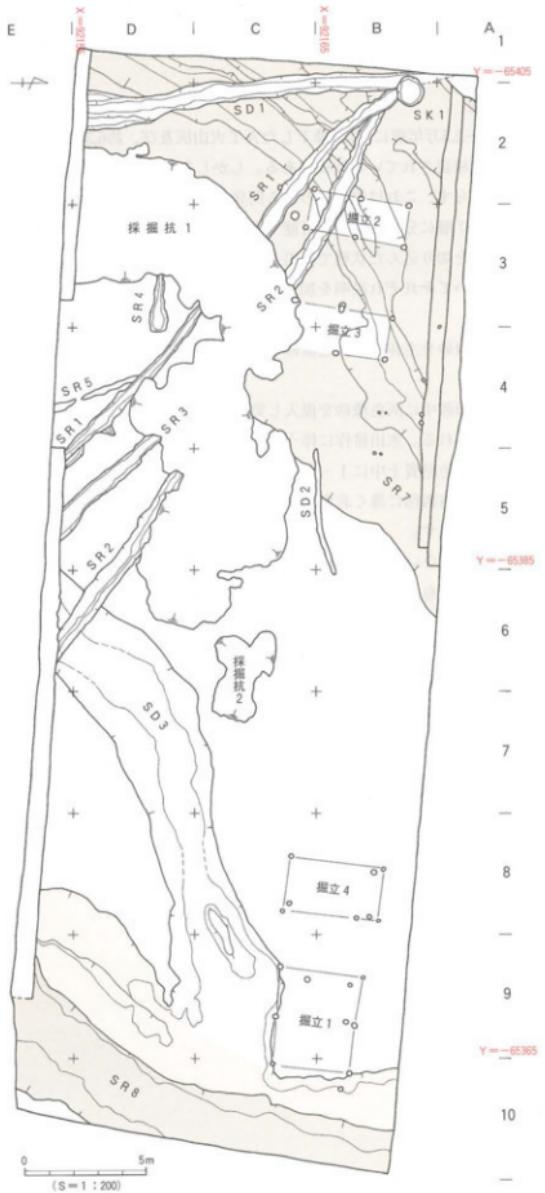
午前10時より、一般市民対象の現地説明会を開催する。

平成13年8月27日（月）

現場の埋め戻し作業を開始する。

平成13年8月31日（金）

現場事務所内の道具を撤去し、野外における発掘調査を終了する。



第2図 遺構配置図 ( $S = 1 : 200$ )

## 2. 調査地の土層

調査地周辺は約2.2～2.5万年前に噴出・降下したA T火山灰及び、約6,300年前に噴出・降下した喜界アカホヤ火山灰などが確認されている地域である。しかしながら桑原遺跡5次調査地において火山灰の堆積は確認されておらず、これは幾度にわたる開発・削平の結果、消滅したものと理解できる。

調査地の基本土層は7層に分けることが可能である。また、全ての遺構は第V層を含めこれより下位に堆積する安定土層を切り込んだ状態で検出した。

以下、基本上層についてそれぞれ説明を加える。

第Ⅰ層……灰色粘質微砂を主体とし褐色微砂を斑状に混入する水田耕作土で、調査地の全域にみられる。

第Ⅱ層……褐色粘質微砂中に灰色微砂を混入し第Ⅰ層の下位に薄く堆積する土層で、調査区のはば全域にみられる。水田耕作に伴う床土であると考えられる。

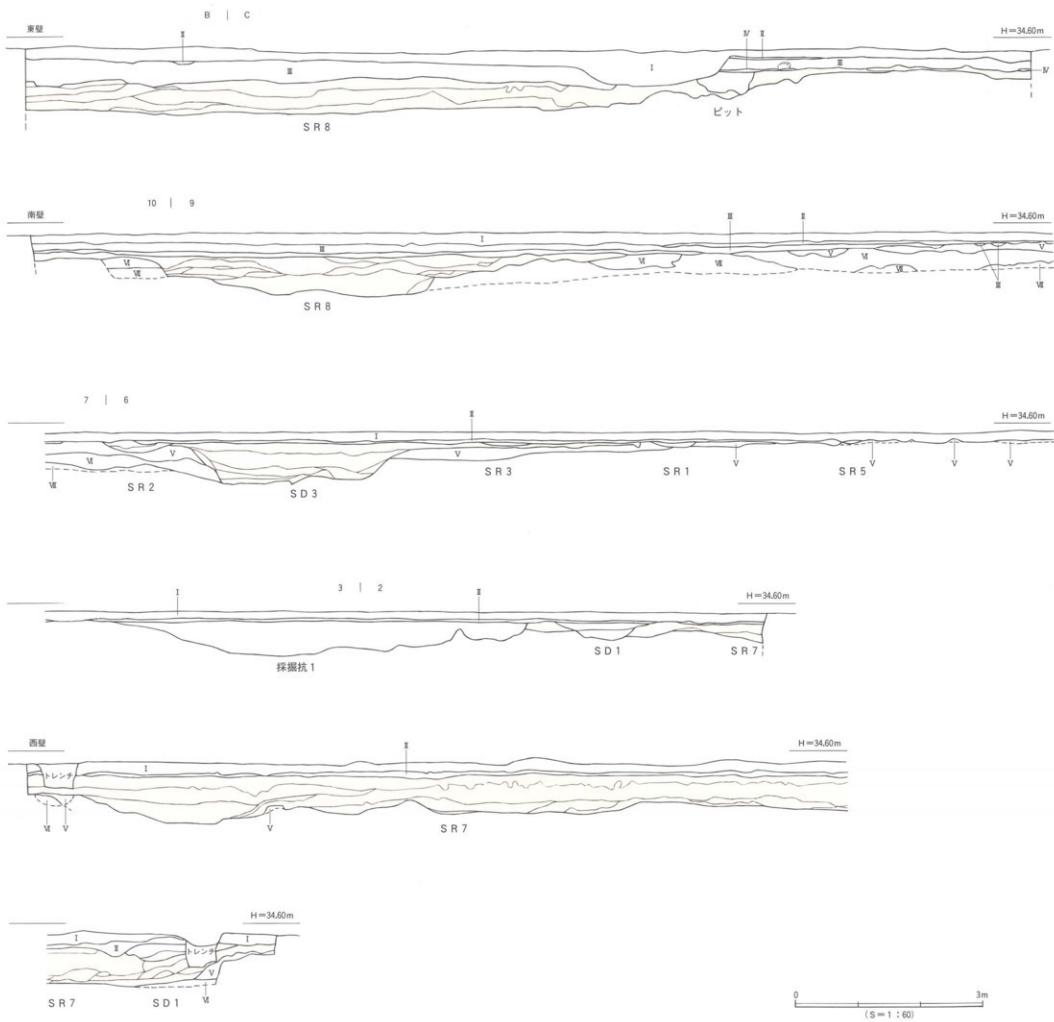
第Ⅲ層……暗褐色（灰）色粘質土中に1～3cm程の砂粒をまばらに含む。主に調査区の東側に堆積する土層で、南西部に薄く北東部に厚く堆積する。中世の遺物包含層であり、水田耕作土の可能性を残す。

第Ⅳ層……第Ⅲ層にともない、その下位に薄く堆積する土層で、褐色～灰色粘質微砂土で構成される。その分布が第Ⅲ層に付随することから、第Ⅲ層を水田耕作土とみた場合水田耕作土に伴う床土である可能性が高い。

第Ⅴ層……地山。しまりの非常に強い白色粘土で、内部に黄褐色微砂を斑状に含む。

第Ⅵ層……地山。暗灰色細砂。一部2～3mm人の砂疊層と1mm前後の微砂層が互層堆積をなす。

第Ⅶ層……地山。黄褐色粘土を主体に白色粘質微砂および灰色粘質微砂をまばらに混入する。



第3図 調査区土層図 (S = 1 : 60)

## 第Ⅳ章 遺構と遺物

桑原遺跡 5 次調査地における発掘調査の結果、古墳時代から中・近世に至る時期の遺構を検出し、その内部及び遺物包含層中より縄文時代から近世の遺物が出土した。

今回検出した遺構には、ピット (S P) 40基〔そのうち掘立柱建物跡 (掘立) が4棟〕、土坑 (S K) 1基、自然流路 (S R) 7条 (※ S R 6は欠番である)、溝状遺構 (S D) 3条、粘土探柵坑 (探柵坑) 2基がある。

以下、時代別および遺構別に説明を加える。

### 1. 弥生時代～古代

弥生時代～古代の遺構には自然流路 2 条 (S R 7, S R 8) 及び溝状遺構 1 条 (S D 3) がある。

#### 自然流路 S R 7 (第2図、第11図)

調査区の北西部に検出した自然流路で、地形的条件より北東から南西に向けて流れていたと考えられる。検出時における最大幅約15.6m、深さ17～60cmを測り、降雨時以外には幅2m前後、深さ10cm前後の水量しか流れていなかったものと考えられる。また、西側に広がりながら湾曲して流れる地点を検出した都合であろうが、西岸の立ち上がりが比較的きつく、それとは対照的に東岸は緩やかである。

流路は内部に堆積する土層の状況より、大きく分けて2度の埋没過程 (3段階の利用) が考えられる。

流路の内部は最下位に暗灰色～灰色系の細砂及び粗砂が堆積し、その上位に灰～暗灰色粘土、黒色粘土及び黒褐色粘土等が堆積する〔第1段階〕。しかしながらこの時土地は完全には安定していなかった模様で、緩やかな窪地状を呈していた部分に暗褐色粘質土が堆積〔第2段階〕したことが窺える。この時点での流路としての「おもかげ」が完全に失われ、土地が完全に安定した結果中世の集落〔掘立柱建物および溝状遺構など〕が展開した〔第3段階〕と考えられる。

〔第1段階〕とした上層は、流路が最初に埋没する過程で堆積したと考えられる土層であるが、内部より弥生時代終末～古墳時代前期末頃の土器を主体に弥生時代中期～古墳時代後期の土器及び木製品を出土している。出土遺物から判断して、出土点数が少なく混入品の可能性が強い弥生時代中期及び後期を除く期間に自然流路として機能し、古墳時代中期～後期頃に埋没したことが分かる。

また〔第2段階〕に堆積した土層より古代末を主体とした時期の土器が出土しており、その上面が〔第3段階〕中世後期の集落域として利用されることから、〔第2段階〕とした上層は古代末に堆積し、遅くとも中世前期までに地盤が安定したと考えられる。

以下、流路本来の機能を充分に有していたと考えられる〔第1段階〕及び、流路の機能が完全に失われた〔第2段階〕の出土遺物について記載する。

#### 〔第1段階〕出土遺物

##### (1) 土器 (第4図、第5図、第6図)

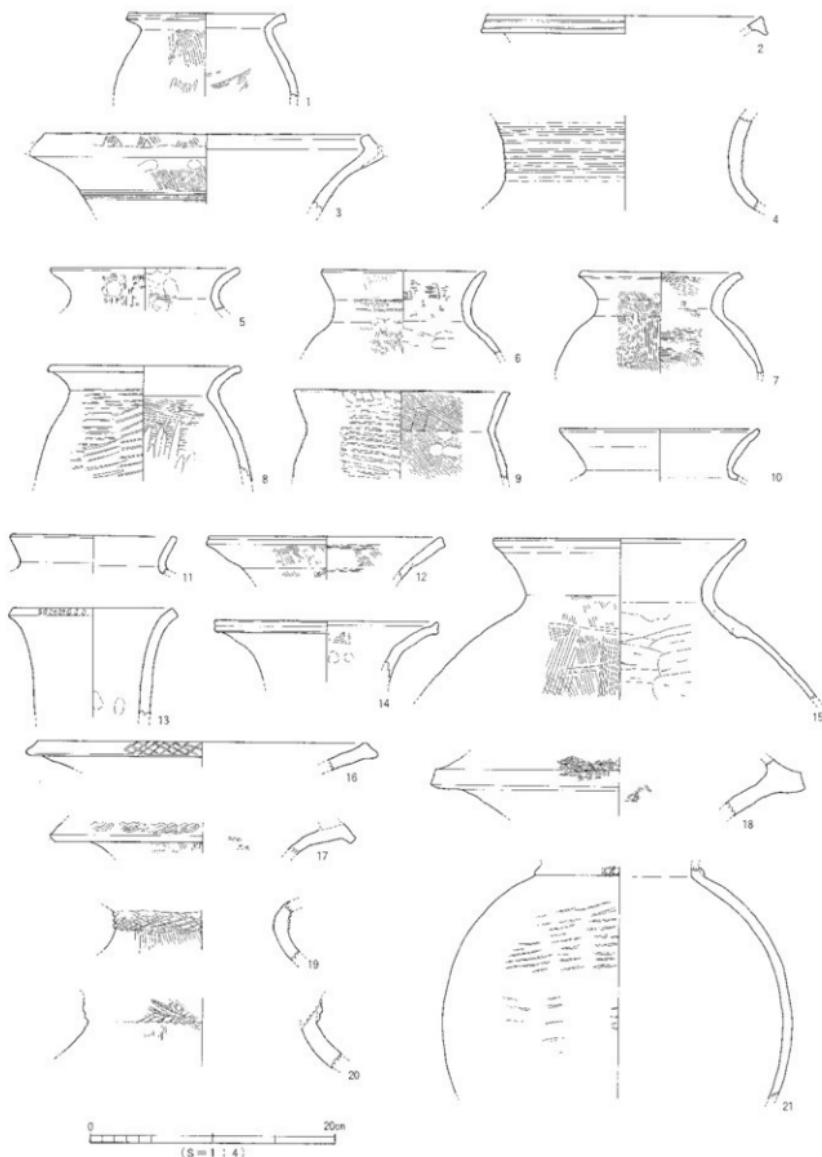
第4図1～4は弥生土器の破片資料で中期後半～後期前半に属するものである。1は口縁部が緩やかに「く」の字状に折れ曲がり、口縁の端部外間に幅約2.5mmのヘラ状工具で一条の凹線を施す壺形土器である。外面調整は口縁部をナデ調整し口縁くびれ部以下をミガキ調整するもので、内面はハケ目調整を行った後に丁寧なナデ調整を施している。焼成は良好で胎土中に3mm以下の石英及び長石を疎らに含有し、色調は内外面ともに灰白色を呈する。2は壺形土器の口縁部小破片で端部を下方に拡張

し、外面に凹線と沈線を上下に2条施す。焼成は良好で堅固、内外面ともに灰黄色を呈する。3は二重口縁壺の口縁部破片で、端部外面に「ハ」の字を重ねた沈線文を施し、また頭部と口縁部の中間に3条の凹線をめぐらせる。焼成は良好で堅固、胎土中に石英及び長石を含む。色調は外面が淡黄色～明黄褐色、内向がにぶい黄橙色を呈する。外面には細かいハケ目調整、内面はナデ調整が施される。4は壺形土器の頭部破片で、焼成はあまり良好でなくその為摩滅が著しい。外面に凹線を数条施すもので、現状では9条の凹線が確認できる。色調は外面がにぶい黄橙色、内面が明黄橙色を呈する。

第4図5～9は壺形土器で、弥生時代後期後半～終末に属するものである。口縁部から肩部にかけて残存する破片資料で、5～7は外面にハケ目調整、8、9は外面にタタキ調整の痕跡が顕著に残る。5は口縁部の約10分の1しか遺存していない小破片で、焼成は良好、色調は外面が淡黄色、内面が淡黄色～黄灰色を呈する。6は口縁部が外方に開きながら立ち上がるものの、口縁部の約5分の1を遺存する。焼成は良好で胎土中に石英、長石、金雲母を含有し、色調は外面がにぶい黄橙色、内面が褐灰色を呈する。外面はハケ目調整を施した後に口縁部をナデ調整するもので、内面調整は口縁部くびれ部以下にヘラケズリ調整を施す。7は口縁部から胴部にかけて約3分の1を遺存するもので、内外面ともににぶい橙色～にぶい黄橙色を呈する。8は内外面にタタキ調整を施し、口縁部をナデ調整、胴部内面を雜にナデ上げる。焼成は良好で色調は外面がにぶい黄橙色～褐灰色、内面が淡黄色を呈する。9は外面にタタキ調整、内面にハケ目調整を施すもので、最後に口縁端部を軽くつまんで形を整えている。焼成は良好で、色調は内面が淡黄色、外面が淡黄色～黒色を呈する。

第4図10、11及び15は土師器の壺形土器で、古墳時代前期～中期に属する。10は口縁端部内面をつまみ上げる薄手の土器で、口縁部の内外面に丁寧なナデ調整、くびれ部以下の内面にヘラケズリ調整を施す。焼成は良好で、色調は内外面ともに灰白色～灰黄色を呈する。11は口縁端部が内側に湾曲気味に立ち上がるるもので、焼成は良好、色調は内外面とも橙色～にぶい黄橙色を呈する。15は口縁端部をやや内側につまみ上げる大型の壺で、胴部外面にハケ目調整、内面にヘラケズリ調整を施す。焼成は良好で胎土中に4mm以下の長石及び石英を疎らに混入する。色調は内外面ともににぶい黄橙色を呈し、口縁部内面が黒色を呈する。

第4図12～14及び16～21、第5図36は壺形土器で、弥生時代後期後半から古墳時代中期に属する。12、14は直立気味に立ち上がる頭部より口縁部が外反して広がるタイプの壺形土器で、古墳時代前期に属すると考えられる。ともに端部外面に凹みが全周すると思われるが、これは端部調整の際に形成されたものである。12は焼成良好で胎土中に4mm以下の石英及び金雲母を多く含み、色調は内外面ともににぶい黄橙色を呈する。14は焼成良好、胎土中に3mm以下の石英及び金雲母を疎らに混入し、色調は内外面ともに淡黄色を呈する。端部内面に細い粘土紐を貼り付けることによって口縁部の最終調整を行ったことが窺える。13は頭部が垂直気味に立ち上がり、口縁端部が緩やかに外反する直口壺である。弥生時代後期後半頃のものと考えられ、口縁端部に連続した刺突状の凹みが観察できる。焼成は良好で、色調は内外面ともににぶい黄橙色を呈する。16は口縁端部を上下に肥厚させ端部外面に連続格子文を施すものである。焼成は良好で、内外面ともににぶい黄橙色を呈する。内面調整は摩滅のため不明であるが外面にナデ調整を施す。17、18は二重口縁壺の口縁部で、大きく内側に入り込む口縁部上段の外面にヘラ状工具による波状文を施す。ともに焼成は良好で口縁部上段の内面および口縁部下段の外面にハケ目調整の後にナデ調整を施す。17の色調は内外面ともににぶい黄橙色、18は外面が淡黄色、内面が灰白色を呈する。19～21は頭部に貼付穴帯をめぐらし、突带上に連続した格子目を施す壺形土器の頭部から体部にかけての破片である。19および20は外面にハケ目調整を施した後にナデ調整を施し、21は球形の体部外面にタタキ調整の痕跡が顕著に残る。20は内面に丁寧なナデ調整を加



第4図 S R 7出土遺物（1）

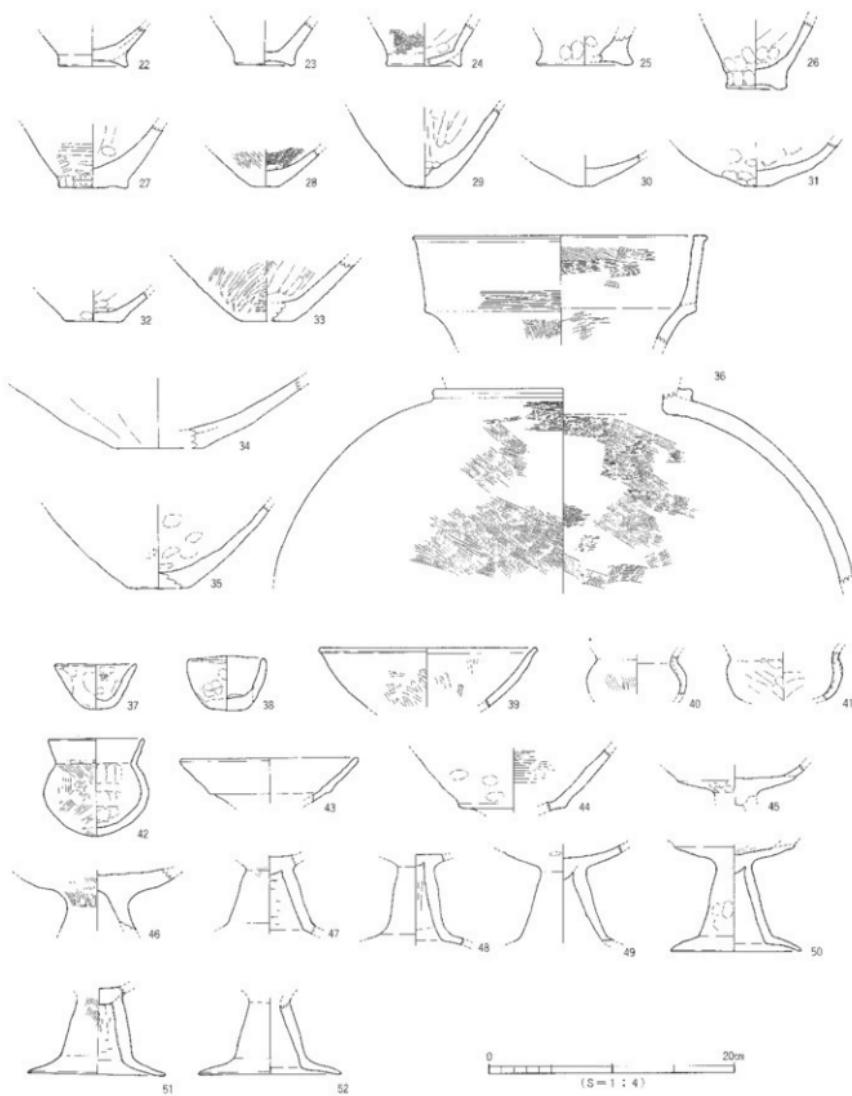
えるものであるが、19及び21は摩滅のため不明である。それぞれ焼成は良好で、19の色調は外面が浅黄橙色、内面が灰白色、20は外向が明黄褐色～黄橙色、内面が浅黄橙色、21は外面がにぶい黄褐色、内面が褐色を呈する。第5図36は厚手の壺形土器で、頸部にタガ様の突帯をめぐらせ上方に二段に屈曲して伸びる口縁部を有する大型品である。体部と口頸部の復元径が異なるが同一個体で、古墳時代前期～中期初頭に属すると考えられる。内外面にハケ目調整を施し、特に口縁部上段外面に関しては水平方向にハケ目調整を施した後にナデ調整を加えている。焼成は良好で非常に堅固、胎土は緻密で胎土中に1mm前後の石英及び長石を疎らに含む。色調は内外面ともに灰黄褐色～にぶい黄橙色を呈する。

第5図22～35は壺形土器及び壺形土器の底部で、22～27はあげ底（高台）状の底部を有し、30及び31が丸底、その他は平底である。22および24は弥生時代後期後半頃に属する壺形土器の底部である。22は焼成が良好で、胎土中に長石、金雲母、石英を多量に含む。色調は外面が灰黄褐色、内面が褐色～黄褐色を呈する。器面調整は内外面ともにナデ調整を施している。24は焼成が良好で、胎土中に1mm前後の石英及び長石を疎らに含む。外面に細かいハケ目調整を施し、他の部位にはナデ調整を施す。色調は外面がにぶい黄橙色、内面が褐色を呈する。23は底部を指でつまみ出すことによって高台状にする弥生時代終末頃の壺形土器である。焼成は良好で、器面調整は内外面ともにナデ調整を施す。胎土は密で、胎土中に3mm以下の石英及び長石を疎らに含む。色調は外面がにぶい黄橙色、内面が褐色を呈する。25は内外面にナデ調整を施すもので、胎土は緻密で精製した粘土を使用していることが分かる。色調は外面が淡赤橙色、内面がにぶい黄橙色を呈し、弥生時代終末頃に属すると考えられる。26は弥生時代後期～終末に属する壺形土器の底部である。底部に粘土紐を貼り付けて上げ底状にするもので、内外面に調整時の指頭圧痕が顕著に残る。焼成は良好で堅固、胎土は密で胎土中に1mm前後の長石及び石英を疎らに含む。外面に黒斑が見られ、色調は内外面ともに明黄褐色を呈する。27は外面にタタキ調整の痕跡を顕著に残す弥生時代終末の壺形土器である。底部周辺に指頭圧痕を顕著に残し、内面にナデ調整が施される。焼成は良好、胎土は密で中に1mm前後の石英をわずかに含む。

28及び29は小さな底部から体部がややきつく立ち上がるるもので、弥生時代後期後半～終末頃に属する壺形土器の底部である。28は焼成が良好で、内外面ともに丁寧なハケ目調整が施される。胎土は密で、中に1～2mm前後の石英及び長石を含む。色調は外面が灰黄色、内面が灰白色を呈する。29は内外面ともに雑なナデ調整を施すもので、特に内面の調整は粗い。焼成は良好で、胎土は密であるが中に金雲母及び3mm程の石英を含む。色調は内外面ともに灰白色を呈する。

30及び31は若干尖り気味であるが丸底の壺形土器で、古墳時代前期に属すると考えられる。内外面ともに丁寧なナデ調整が施され、特に31の内面は工具によるヘラケズリ調整を施した後にナデ調整が加えられている。30は焼成が良好で胎土は緻密、胎土中に1mm前後の石英を多く含む。色調は外面が灰白色～明褐色、内面が淡黄色～明褐色を呈する。31は焼成が良好で胎土は緻密、胎土中に3mm以下の石英及び長石、金雲母を多く含む。色調は外面が灰白色～褐色、内面が明黄褐色を呈する。

33は外面にタタキ調整の痕跡を残す弥生時代終末の壺形土器、34は弥生時代後期後半～終末頃の壺形土器、32及び35は弥生時代後期後半から終末頃の壺あるいは壺形土器の底部である。33は内面にハケ目調整を施し、その後にナデ調整を加える。焼成は良好で胎土は緻密、胎土中に1mm前後の石英及び金雲母を疎らに含む。色調は外面が灰黄色～灰褐色、内面が褐色～灰色を呈する。34は内外面ともにナデ調整を施すもので、底部付近に黒斑が見られる。焼成は良好で胎土中に1mm前後の長石及び石英を多く混入する。色調は外面がにぶい黄橙色、内面が灰黄色～黄褐色を呈する。32は底部全体にナデ調整を施すもので、34と同様底部付近に黒斑が見られる。胎土は密、胎土中に1mm前後の長石及



第5図 SR7出土遺物（2）

び石英を疎らに含む。焼成は良好で、色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈する。35の器面調整は内面にナデ調整、外面にハケ目調整を施した後にナデ調整している。焼成は良好で、底部付近には黒斑が見られる。胎土は密で、胎土中に4mm以下の石英を含む。色調は外面が灰白色、内面が灰黄褐色～ぶい黄橙色を呈する。

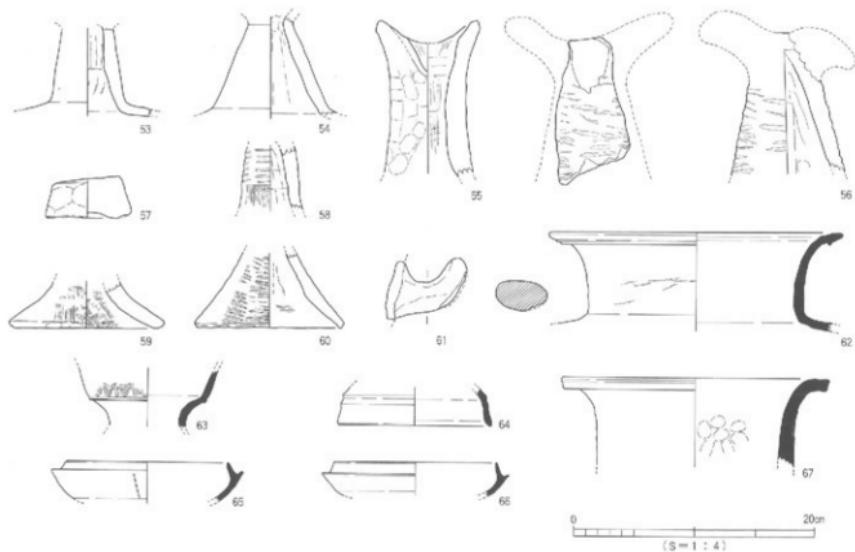
第5図37～39は弥生時代終末～古墳時代前期の鉢形土器で、37及び38は手捏ねのミニチュア製品、39は内外面にミガキ調整を施す精製品である。37は内面の一部にハケ目調整を施した痕跡を残し、底部から口縁部にかけて外器面の約2分の1に黒斑が見られる。口縁端部の一部が欠損するが、ほぼ完形品で焼成は良好、胎土は緻密で胎土中に1mm以下の石英及び金雲母をわずかに含む。色調は外面が灰白色、内面が浅黄橙色～黄橙色を呈する。38は口縁部の一部を欠損する完形品で、底部周辺に黒斑が見られる。焼成は良好で、胎土は緻密である。色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈し、底部周辺は黒斑のため黒色を呈する。39は全体の約12分の1を残す鉢形土器で、口縁端部が軽く外反する。焼成は良好で、胎土は緻密、胎土中に1mm以下の石英および金雲母を疎らに混入する。色調は外面が褐色、内面がぶい黄橙色を呈する。

第5図40～42は小型丸底鉢及び小型丸底壺である。40及び41はやや扁平な体部をもつ小型丸底鉢で、弥生時代終末～古墳時代前期初頭頃に属する。40は外面にハケ目調整を施した後に一部ナデ調整を施し、内面にナデ調整を施す。3×6cmほどの破片資料で、色調は内外面ともに灰黄褐色を呈する。焼成は良好で胎土は緻密、胎土中にわずかに微粒の長石が含まれる。41は内外面ともにナデ調整を施すもので、外面に一部黒斑が見られる。焼成は良好で胎土は緻密、40同様胎土中に混入物はほとんど見られない。色調は外面がぶい黄橙色、内面が灰黄褐色を呈する。42は球形の体部を持ち口縁部がやや外方に向かって立ち上がる小型丸底壺で、体部外面にハケ目調整を施す。また一部しか残存していないため詳細は不明であるが、口縁部及び内面全体に丁寧なナデ調整を施している。焼成は良好で胎土は緻密、色調は外面が灰白色～ぶい黄橙色、内面がぶい黄橙色を呈する。古墳時代前期～中期初頭に属すると考えられる。

第5図43～第6図54は高坏で、ほとんどが古墳時代前期～中期初頭に属するが、46のみ弥生時代後期頃に属する。43は坏部の破片資料で、坏部下半が短く伸び上半部が短く直線的に広がるタイプである。内外面ともにナデ調整を施し、内面は特に丁寧な調整が施される。焼成は良好で胎土は緻密、胎土中に2mm以下の石英及び長石を疎らに含む。古墳時代前期初頭に属すると考えられる。44は坏部下半に比べ上半部が大きく伸びるもので、古墳時代前期初頭～前半頃に属する。内外面ともにナデ調整を施すもので、内面に横方向のハケ目調整を施した痕跡が残る。焼成は良好で胎土は緻密、胎土中に1mm以上の混入物はほとんど見られない。色調は外面が黄橙色、内面が浅黄橙色を呈する。45は坏部下半及び脚部との接合部分で、内外面ともに丁寧なナデ調整が施される。焼成は良好で胎土は緻密、胎土中に4mm以下の石英及び長石などを疎らに混入する。46は弥生時代後期頃の高坏で、坏部と脚部の接合部分である。器面調整は外面に内外面ともにハケ目調整の後にナデ調整を施すものと考えられるが、坏部内面は摩滅のため不明である。また、接合部外面までナデ調整が及んでおらず、ハケ目調整の痕跡が残る。焼成は良好で胎土は密、胎土中に4mm以下の石英及び金雲母を多量に含む。色調は外面が灰白色、内面が褐色～明黄褐色を呈する。

47～51は坏部下半から脚部に至る資料、52～54は脚部である。強いて言えば47、49、51、53、54は脚部が厚手で裾部への広がりが大きいことから古墳時代前期末～中期初頭頃に属する可能性が高い。47は脚部外面にハケ目調整の後にナデ調整を施し、脚部内面に横方向のヘラケズリ調整を施す。焼成は良好で胎土は密、胎土中に3mm以下の石英及び長石、金雲母を多く混入する。色調は内外面ともに

浅黄橙色を呈する。48は細い脚部の外面にナデ調整を施し、内面にヘラ状工具による縦方向のナデ調整を施す。焼成は良好で胎土は緻密、胎土中に2mm前後の石英及び金雲母をわずかに混入する。色調は内外面ともに淡黄色～明黄褐色を呈する。49は坏部下半が上方に向かって緩やかに湾曲するもので、脚部内面を除いて丁寧なナデ調整が施される。焼成は良好で胎土は緻密、脚部内面には横方向のヘラケズリ調整が施される。色調は外面がぶい黄橙色、内面が淡黄色およびぶい黄橙色を呈する。50は坏部下半から裾部に至る部位の資料で、脚部内面に横方向のヘラケズリ調整を加えるほか他の部位に丁寧なナデ調整を施す。また特に、坏部下半内面の中央付近にはナデ調整時あるいはそれ以前に施されたと考えられる放射状の工具痕跡が残る。焼成は良好で胎土は緻密、胎土中に1mm以下の石英及び金雲母を疎らに混入する。色調は内外面ともに橙色～ぶい黄橙色を呈する。51は脚部の内面に縦および横方向のケズリ調整を施し、他の部位はハケ目調整の後にナデ調整を加えている。焼成は良好で胎土は緻密、胎土中に1～3mmほどの長石及び石英を疎らに含む。色調は外面が灰白色～黄橙色、内面が褐灰色を呈する。52は脚部内面に入念なケズリ調整を加え、他の部位にミガキ調整を施す。焼成は良好で胎土は緻密、器壁が非常に薄く古墳時代前期初頭頃に属すると考えられる。色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈する。53は器壁が厚い高坏の脚部で表面の大部分が摩滅のため不明であるが、辛うじて脚部内面に工具によるケズリ調整が確認できる。焼成は良好で胎土は密、胎土中に2mm以下の石英を少量含む。色調は内外面ともに橙色を呈する。54は53同様厚手の高坏脚部で、脚部が接合部から大きく広がる。色調は外面が明赤褐色～浅黄橙色、内面が黄橙色を呈し、器面調整は外面にナデ調整、内面にケズリ調整が施される。焼成は良好で胎土は緻密、胎土中に1mm前後の石英を少量



第6図 SR7出土遺物（3）

含む。

第6図55～60は支脚で、61は瓶の把手部分の破片資料である。55は全体の約2分の1を欠損する復元品で、焼成は良好、胎土は密で胎土中に1mm前後の長石及び石英、金雲母を疎らに含む。外面はタタキ調整を行った後にナデ調整を施し、内面はナデ調整を施している。色調は外面が浅黄色～黄灰色、内面が灰黄色を呈する。56は2本の角状突起を欠損する支脚として、推定復元したものである。外面にタタキ調整痕を覗察に残し、内面にはナデ調整の痕跡およびシボリ痕跡が残る。焼成は良好で胎土は密、色調は外面が浅黄色～黄灰色、内面が褐色～にぶい黄褐色を呈する。57は断面台形状、平面形態が円形の支脚で、底部を除く外面には丁寧なナデ調整が施される。焼成は良好で胎土は密、胎土中に2mm以下の石英を少量混入する。底部には雑なナデ調整を施し、色調はにぶい黄橙色を呈する。58は外周をタタキ調整した後、下半部だけにハケ目調整を加えるもので、内面にはナデ調整の痕跡及びシボリ痕跡が残る。焼成は良好で胎土は密、胎土中に1mm前後の長石を疎らに含む。色調は内外面ともに褐色～にぶい黄橙色を呈する。59、60は支脚の裾部で、それぞれ外面にハケ目調整及びタタキ調整の痕跡が残る。内面にはともにハケ目調整の痕跡を有し、60にはシボリ痕跡が見られる。59の色調は外面が灰白色、内面が灰黄色を呈し、焼成は良好で胎土は緻密である。60は焼成良好で胎土は密、胎土中に3mm以下の石英及び長石、金雲母を含む。色調は外面が橙色～にぶい黄橙色、内面が黄灰色及びにぶい橙色を呈する。61は瓶の把手で、色調は灰白色～にぶい黄橙色を呈し、残存部位には全てナデ調整が施される。焼成は良好で胎土は密、胎土中に1mm以下の石英を多く混入する。古墳時代中期に属すると考えられる。

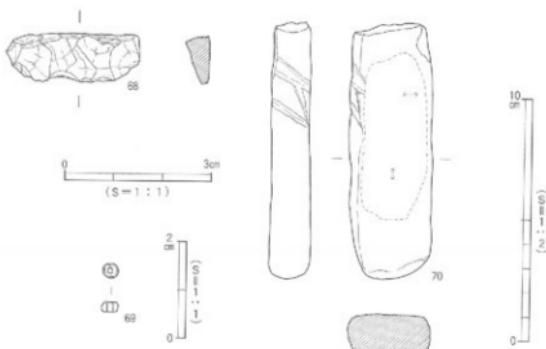
第6図62～67は須恵器で62及び67は壺、63は胞、64～66は蓋坏である。62は器壁が薄く丁寧な調整が施される須恵器の壺で、内外面をハラ状工具及び指によってナデ調整している。口縁部が直立気味に立ち上がり、端部が外反しながらシャープに広がるもので、肥厚させた端部外面に2条の凹線をめぐらせる。胎土は緻密で色調は外面が灰白色～紫灰色、内面が灰色、断面が紫灰色を呈する。焼成は良好で堅固、古墳時代中期に属すると考えられる。63は胞で広い頸部から短い口縁部のがび、口縁部外面に櫛刷波状文及び凹線を施す。胎土は緻密で色調は内外面ともに暗灰色、断面が紫灰色を呈する。焼成は良好で堅固、古墳時代中期に属する。64～66は蓋坏で64は坏蓋、65、66は坏身である。焼成はやや甘く、色調は灰色～暗緑灰色を呈する。64は古墳時代後期前半、64、65は古墳時代後期後半ころに属する。67は口縁部の破片資料で、直立気味に立ち上がる口縁端部を外方に折り曲げる。焼成は良好で胎土は緻密、色調は内外面ともに灰色を呈し、器面調整は内外面ともにナデ調整を施す。

## (2) 石器・玉類（第7図）

第7図68及び70は石器で68は安山岩製の剥片、70は堆积岩（凝灰岩？）製の砥石である。68は主要剥離面を別の反対側に持つ横長剥片で、上部に原礫面が残る。70は1面を砥石として利用し、側面に平行に刻まれた数条の敲打痕が残る。68はS R 7上層、70は下層よりの出土である。69はS R 7上層から出土したガラス小玉で、薄い緑色を呈する。

## (3) 木製品・植物遺体・獣骨（第8図、第9図、図版14）

第8図71～第9図84は木製品で、ほとんどが下層より出土している。71～73及び78は先端部を加工して尖らせるもので、小型品である71を除いて杭であると考えられる。71は舟巾である可能性があるが、断言することはできない。72は先端部が使用によって折れたと推測されるもので、松属複葉管束亞属を素材とする。73は遺存状態があまり良好ではなく所々に腐りが見られるが、一部樹皮を遺存す



第7図 SR 7出土遺物（4）

るもので素材は松属複縫管束亜属が用いられる。78はヤマグワを素材とする。74及び75は箆面全体に面取り加工を施していると考えられる棒状の加工材である。74は素材にヒノキを用いており、一部に焼けた痕跡が残る。75はコウヤマキを素材とする。

76は腐りが進行しているために詳細は分からぬが、一部をホゾ状に加工していると考えられるものである。センダンを素材としており、表面の一部に焼けた痕跡が残る。77は端部に焼けた痕跡を残す木片である。

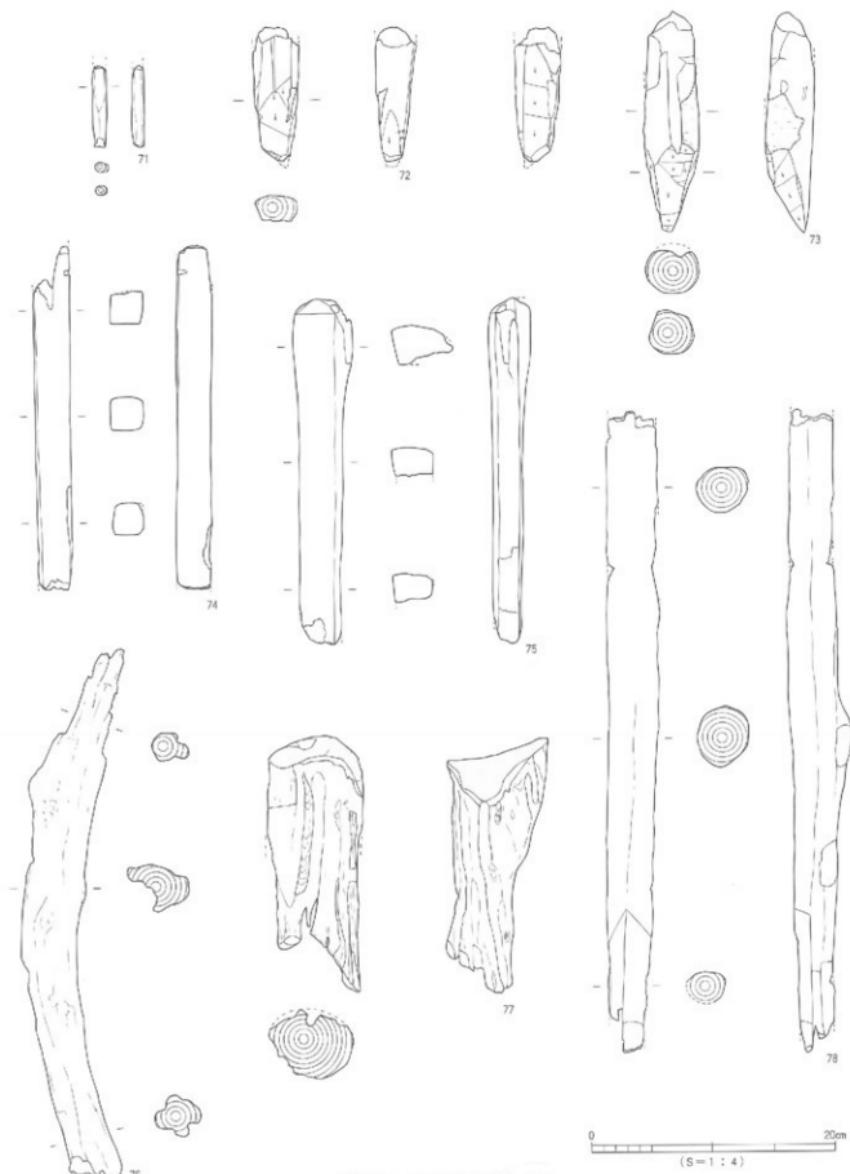
第9図79は加工時に生じたと考えられる木片で、端部に加工痕が見られる。

80は板材の破片で、モミ属を素材することが判明している。

81は複数の加工した板材に穴を穿ち、互いをツル状の紐で組み合わせた木製品である。遺存状態があまり良好でないために加工痕などに関する詳細は不明であるが、板材にヒノキを用いることが判明している。また板材に穿かれた穴の位置や、火を受けて焼けた痕跡などの情報から製品時の状況をわずかながら知ることができる。

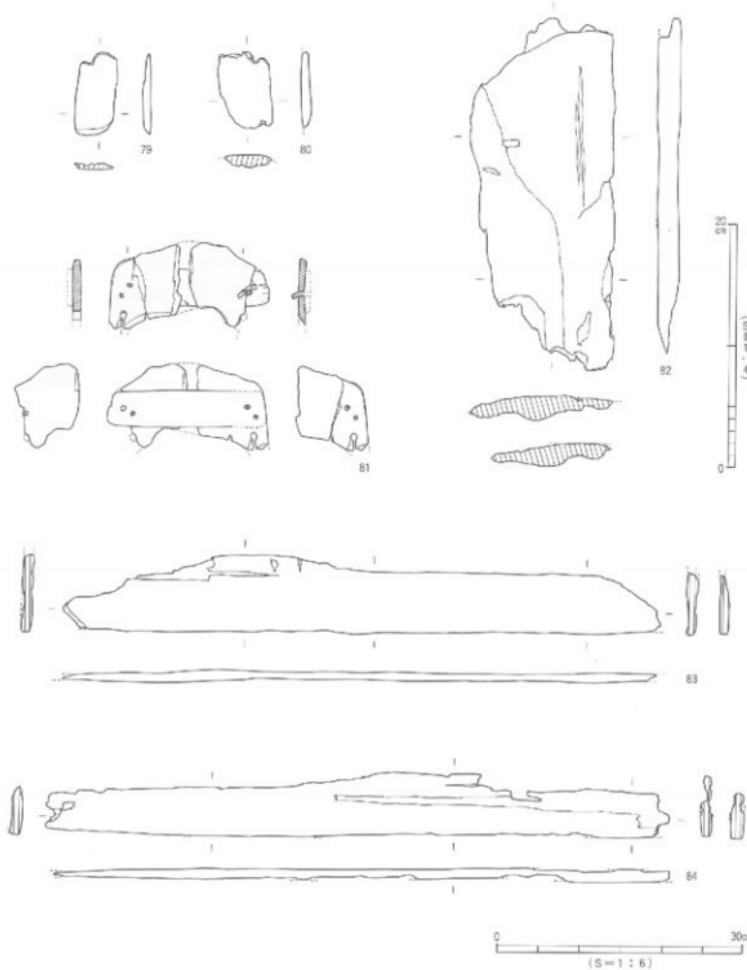
82～84は幅広の板材で、82に関しては裏面全体が欠損している可能性を残す。使用される木材は82がモミ属、83がヒノキ、84がスギであることが判明している。

図版14下段の右側に掲載した写真は、流路下層より出土した植物の種子及び草食獣の骨である。獣骨は牛あるいは馬の臼歯で、種子は左からモモ核、ジュズ、ヒョウタン類のものと考えられる。



第8図 SR 7 出土遺物 (5)

0  
20cm  
(S=1:4)



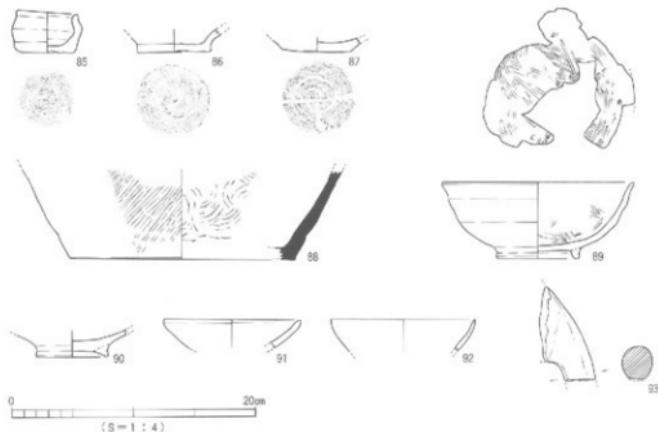
第9図 SR 7出土遺物（6）

## 〔第2段階〕出土遺物（第10図）

第10図85～90は古代末（10世紀末～11世紀初頭）に属するもの、91～93は混入品で14世紀代に属する。

85は器面全体を回転ナデ調整し、底部を回転ヘラ切りによって切り離す。焼成は良好で胎土は緻密、色調は外面が灰黄褐色、内面がにぶい黄橙色、底部が褐灰色を呈する。86及び87は円盤状の高台の底部を回転ヘラ切りによって切り離す土師器の坏である。86は内面が燃されたように黒褐色を呈し、外面はにぶい黄橙色を呈する。焼成は良好、胎土は緻密で内外面ともに丁寧なナデ調整が施される。87は焼成が良好で胎土は緻密、内外面ともに浅黄橙色を呈する。器面調整は摩滅が著しいために分からぬ。88は須恵器の壺で、外面に並行タキ、内面に同心円タキ（半円か正円かは不明）調整が施される。底部はヘラ切りされるようであるが、小片のため詳細は分からない。色調は外面がオリーブ灰色、内面が灰色を呈し、焼成は良好で胎土は緻密、胎土中に2mmから4mmを測る暗灰色の塊がわずかに見られる。89は内黒の黑色土器で、内面にミガキ調整を施し、外面は丁寧なナデ調整が施される。底部は回転ヘラ切りによって切り離した後、輪高台が貼り付けられる。焼成は良好で胎土は緻密、色調は外面が灰白色、内面が黒色を呈する。90は壺の底部で、回転ヘラ切り調整によって切り離した後に輪高台を貼り付ける。焼成は良好で胎土は緻密、色調は内外面ともに明るい浅黄橙色を呈し、器面調整は摩滅のため不明である。

91及び92は土師器坏の口縁部で、内外面に回転ナデ調整を施す。焼成は良好で胎土は緻密、口縁端部がやや内側に入りながら立ち上がる。91の色調は外面が灰白色、内面が黄灰色を呈し、92は内外面ともに灰白色を呈する。93は瓦質に焼かれた羽釜の脚部で、緻密な胎土中に2mm以下の石英を疎らに混入する。



第10図 S R 7 出土遺物（7）



第11図 SR 7測量図 (S = 1 : 80)

## 自然流路 S R 8 (第2図、第12図)

調査区の東端で検出した自然流路で検出長約16mを測る。周囲の地形的な要因から考えて北東から南西に向けて流れていると考えられる。また、流路の下層及び最下層〔第1段階〕より古墳時代前期～後期の遺物を出土することから、遙くとも古墳時代後期には機能していたと考えられる。

この流路は古代末の段階、S D 3の設置に伴って人为的な改修行為が行われた〔第2段階〕と考えられ、流路の西側をテラス状に削り込み S D 3 の底のレベルとほぼ同じ高さに削ることによって、流路内部に流れる水を S D 3 内部に導いていたと考えられる。また出土遺物より、流路の埋没時期は遙くとも中世後期であると考えられる。

改修以前（古墳時代後期）における検出時の流路規模は上場の幅が約3.2～4.2m、下場の幅が1m前後、深さが約30～50cmを測り、S D 3 の設置に伴って西岸付近（主に S D 3 より北側）の幅1～2.5mほどの範囲全体が24～40cm程度平坦に掘り下げられる。

## 〔第1段階〕出土遺物

## (1) 土器 (第13図94～112)

第13図94～97は弥生上器の底部で、94が後期末、95が中期後半～後期前半頃、96、97が後期後半～終末頃に属するものである。94は外間にタタキ調整、内面にナデ調整を施す壺である。焼成は良好、胎土は密で胎土中に2mm以下の石英を疎らに含む。色調は外面が浅黄橙色～黄灰色、内面が浅黄橙色を呈する。95は上げ底の壺形土器で、焼成はやや甘く内外面にナデ調整が施される。胎土は粗く、胎土中に2mm以下の石英及び長石を多く混入する。色調は外面が褐灰色、内面がにぶい黄橙色を呈する。96は壺形土器の底部で、器壁は厚く内外面にナデ調整の痕跡が残る。焼成は良好で胎土は密、胎土中に2mm以下の石英を疎らに含む。色調は、内外面ともに灰黄色を呈する。97は壺あるいは壺形土器の底部で、外間にハケ目調整、内面にナデ調整の痕跡が残る。焼成は良好で胎土は密、胎土中に1～3mm程度の石英及び長石を疎らに混入する。外間に黒斑を有し、色調は外面がにぶい黄橙色および黒色、内面がにぶい黄橙色を呈する。

第13図98は口縁部上段が内側に湾曲しながら立ち上がる二重口縁壺の口縁部で、古墳時代前期～中期に属する。焼成は良好、胎土は密で胎土中に微粒の長石を疎らに混入している。口縁部上段内面にハケ目調整の痕跡が残るが、それ以外は丁寧なナデ調整が施される。色調は外面が灰黄褐色、内面がにぶい黄橙色を呈する。

第13図99、100は壺形土器の口縁部で古墳時代前期末～中期のものである。99は口縁端部を軽くつまみ出すもので、内外面ともにナデ調整が施される。焼成は良好であるが胎土は粗く、胎土中に1mm前後の石英及び長石を多数含む。色調は内外面ともに灰白色を呈し、外面の一部が灰黄褐色を呈する。100は口縁端部内側に段を有するもので、内外面ともに丁寧なナデ調整が施される。焼成は良好で胎土は密、胎土中に1mm前後の石英及び長石を疎らに混入する。色調は、内外面ともににぶい黄橙色を呈する。

第13図101及び102は高杯の脚部で古墳時代前期頃のものである。101は摩滅のため不明瞭であるが、外面にミガキ調整の痕跡をわずかに残す。焼成は良好で胎土は緻密、胎土中に1mm以下の長石を少量混入する。色調は外面がにぶい橙色～灰白色、内面が橙色～にぶい黄橙色を呈する。102は内外面にナデ調整を施すもので、据部にはハケ目調整の痕跡が見られる。焼成は良好、胎土は緻密で胎土中に混入物はほとんど見られない。色調は外面が橙色～にぶい黄橙色、内面がにぶい橙色～にぶい黄橙色を呈する。

第13図103は支脚で、角部の一部と裾部の約10分の9を欠損する。外面には指頭圧痕、内面にはシボリ痕が顕著に残る。焼成は良好で、胎土は粗く胎土中に3mm以下の石英及び長石を多く混入する。色調は外面が灰白色、内面が黄褐色を呈する。

第13図104～112は古墳時代の須恵器で、104は甕形土器の口縁部、105は提瓶の肩部、106は広口壺、107は有蓋高坏の蓋、108～112は蓋坏である。104は口縁端部をわずかに肥厚させるもので、内外面には回転ナデ調整が施される。焼成は良好で胎土はやや粗く、胎土中に5mm以下の石英を疎らに混入する。色調は外面とともに灰色、断面は紫灰色を呈する。古墳時代後期に属する。105は古墳時代後期後半に属する提瓶である。焼成は良好で胎土は緻密、色調は外面が暗灰色～オーリーブ灰色、内面が灰色を呈する。106は甕形土器で、全体の約3分の2を欠損する。焼成は良好で、内外面に自然釉の付着が著しい。頸部に幅の広い凹線を1条めぐらせ、肩部以下に回転ヘラケズリ調整を施した後、部分的にハケ様工具を用いた手持ちヘラケズリ調整が施される。焼成は良好で胎土は緻密、胎土中に2mm以下の石英が疎らに含まれる。色調は外面が暗オーリーブ灰色～暗灰色、内面が灰色を呈する。古墳時代中期後半～後期初頭頃に属すると考えられる。107は天井部中央につまみを有する有蓋高坏の蓋で、つまみの外面にカキメ状の痕跡が残る。肩部の段がやや突出しており、自然釉付着のため不明瞭であるが、天井部の約8～9割に回転ヘラケズリが施される。焼成は良好で堅固、胎土は緻密で胎土中に2mm以下の石英が少量化される。色調は外面が灰色～オーリーブ灰色、内面が灰色、断面が紫灰色を呈する。古墳時代中期後半に属する。108及び109は肩部の段が突出し、口縁端部の段が明瞭でシャープな蓋坏の坏蓋である。天井部の約8～9割の範囲に回転ヘラケズリが施され、焼成は良好で堅固である。古墳時代中期後半に属すると考えられる。108の胎土は密で、胎土中に1～3mmの石英を疎らに混入する。色調は外面とともに灰色を呈する。109は胎土が緻密で、色調は外面が灰色～暗灰色、内面が灰色～紫灰色、断面が紫灰色を呈する。110は肩部と口縁端部に凹線状の綫やかな段を有する蓋坏の坏蓋で、全体の約4分の1を欠損する。焼成が良好で堅固、天井部の約8割に回転ヘラケズリ調整を施す。また胎土は緻密で胎土中に1mm前後の石英を少量含み、天井部の内面中央に同心円状の当具痕跡を指でナデ消す。色調は外面とともに灰色～暗灰色を呈する。古墳時代後期前半に属する。111は口縁部の傾きが鈍い坏蓋で、内外面の色調が灰白色を呈する。焼成がやや甘く、胎土は緻密である。古墳時代後期後半頃に属すると考えられ、団化した部位の全面にナデ調整が施される。112は蓋坏の坏身で口縁部の立ち上がりがやや低く、口縁端部内面に段が見られない。焼成は良好で胎土は緻密、色調は外面とともに灰色を呈し、断面は赤灰色を呈する。古墳時代後期後半に属すると考えられる。

### (2) 石器（第14図120）

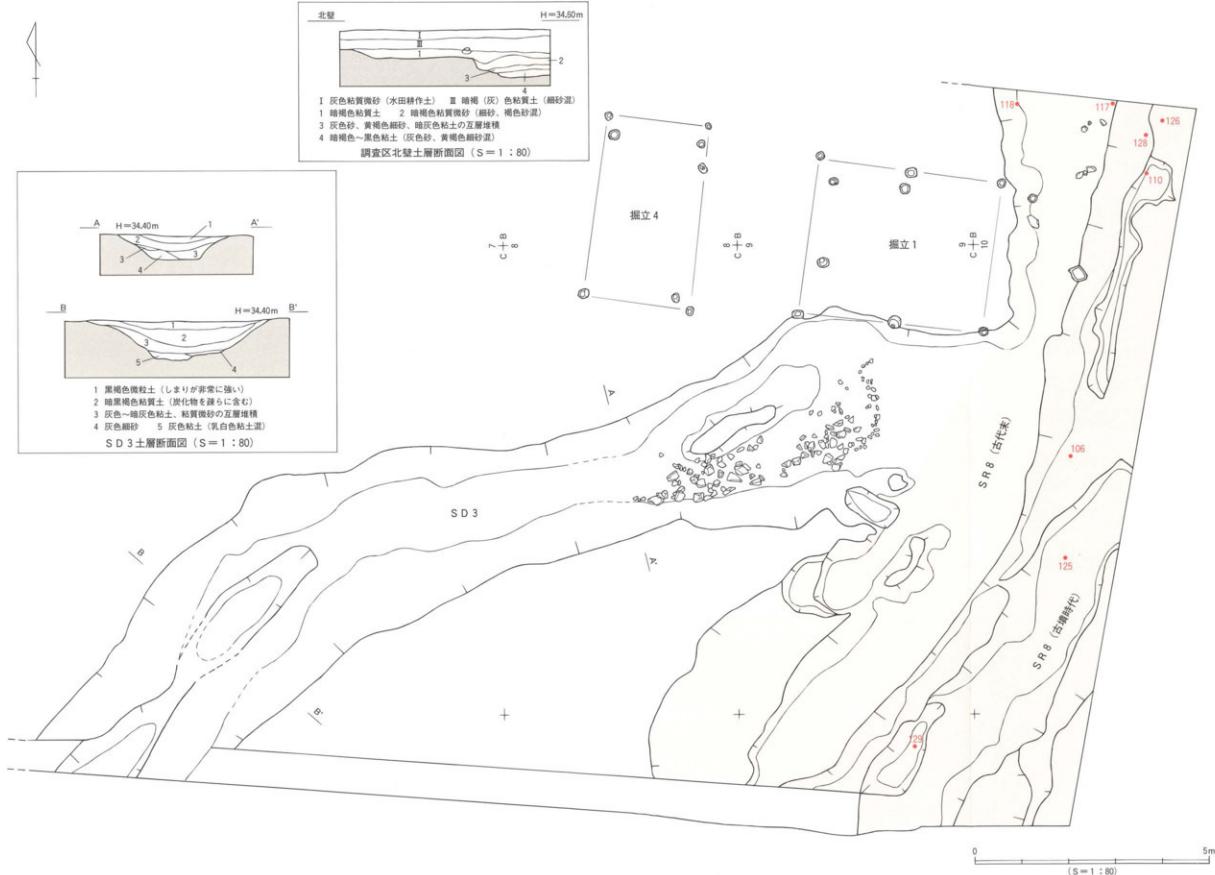
第14図120は安山岩製で基部が凹基の打製石器で、基部の抉りは深い。先端部及び基部の両端に欠損が見られる。

### (3) 木製品・植物遺体・獸骨（第15図、第16図、図版15、図版16、図版17）

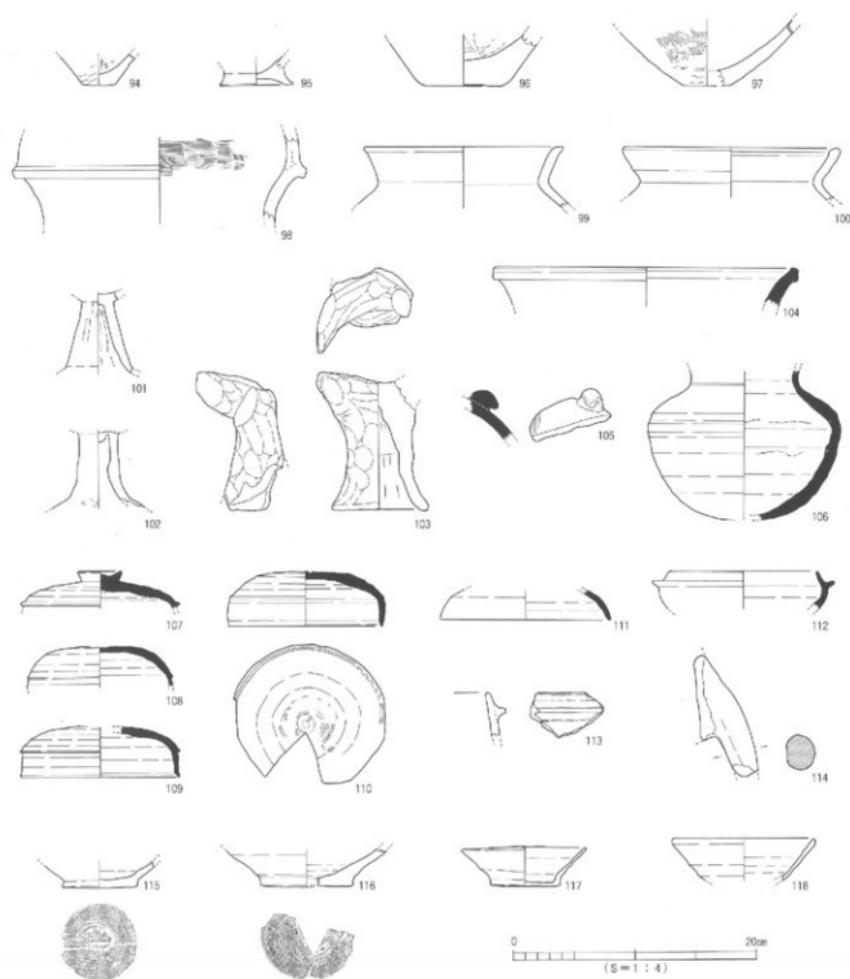
第15図121～第16図130は木製品で、第15図124を除き〔第1段階〕下層より出土している。

第15図121～123は加工時に生じたと考えられる木片で、121は端部に1箇所、122及び123はそれぞれ2箇所に加工痕が見られる。

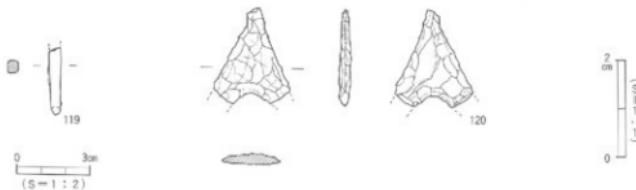
第15図125は一部をホゾ状に加工していると考えられるものである。ヒノキを素材としており、表面に数箇所焼けた痕跡が残る。下半部は腐りの為、詳細は不明である。



第12図 調査区東半部遺構測量図 (S = 1 : 80)



第13図 SR 8 出土遺物 (1)



第14図 SR 8 出土遺物（2）

第15図126は端部に斜め方向の加工面を有する加工材で、素材にクリを用いる。図の上部に火を受けた痕跡が残る。

第15図127は湾曲した棒状の加工材で、材の周囲を加工して左右対称の形状を作り出している。部分的に焼けた痕跡を有し、細かい加工痕と加工の際に刻まれた刃物の痕跡が観察される。素材にマツ属複雑管束亜属を用いることが判明している。農耕具の一部である可能性があるが詳細は不明である。

第16図128はヒョウタンの側面を大きく切り取って容器状に加工した後、両端に穴を穿ち、その穴に細い竹を通した状態で出土した杓子状木製品である。128-1は保存処理前の状態、128-2が保存処理後の状態を図面化したものである。ヒョウタンの側面にはナイフ状の工具で平らに切り取った痕跡が残り、ヘラ状工具を用いて内部の種を取り除いて容器状に加工している。その後、ヒョウタンの上端と下端に穴を穿ち、そこに竹を差し込むと考えられるが、竹の復元径が直径6mm程（鉛筆とほぼ同じ）であることから杓子としての利用方法にはやや疑問が残る。

第16図129はヒノキを加工して作られた木鏸である。長さが16cm、直径が6.2～6.5cm、中央くびれ部の直径が約2.7cmを測る。

第16図130は舟串で、ヒノキを素材としている。表面全体を多角形状（六～八角形）に加工するもので、特に上端部に七角柱の加工を施して尖らせる。全長50cm、上端から9.9～13.4cmの部位に切り込みの痕跡を有する。

また、流路内からは木製品のほかに獸骨及び植物の種子などが出土しており、図版17の最下段中央に掲載した。獸骨は草食獸の歯で、馬あるいは牛のものと考えられる。種子はモモ核、アンズ、ジュズなどがみられる。

#### 〔第2段階以降〕出土遺物

##### (1) 土器 (第13図113～118)

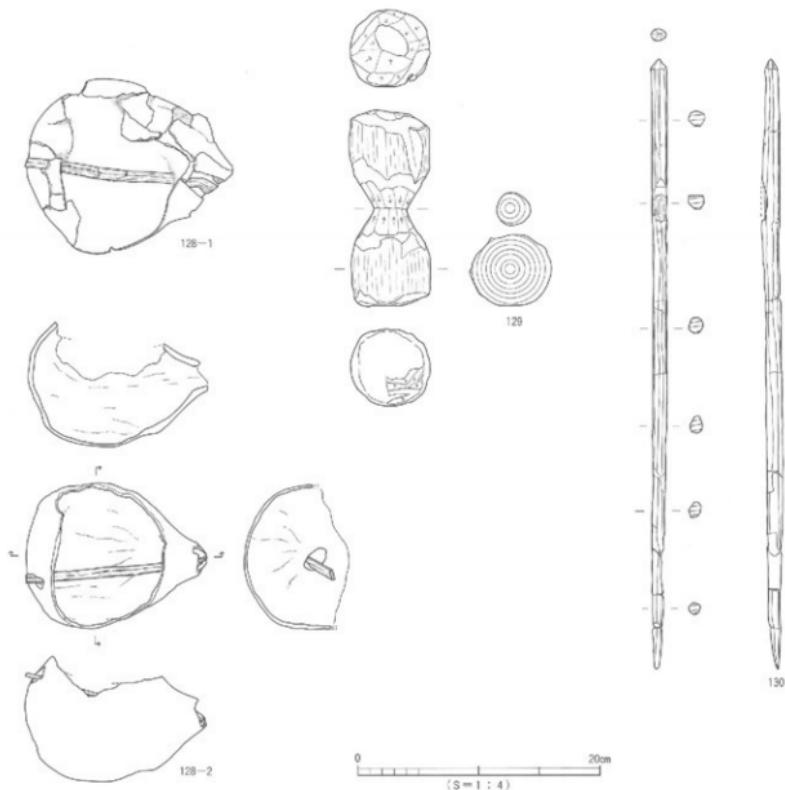
第13図113及び114は土師器の羽釜で、13世紀後半～14世紀初頭に属する。上層から出土していることよりSR 8が埋没する過程で堆積したものと考えられる。113は口縁部で罐部からやや下がった位置に鋸をめぐらせるタイプ、114は脚部である。113は焼成が良好で胎土は粗く、胎土中に2mm以下の石英を多く含む。色調は内外面ともに黒褐色を呈する。114は焼成良好で、色調は脚部外面が明黄褐色及び黒色、胴部内面が灰白色を呈する。胎土はやや粗く、胎土中に3mm以下の石英及び長石を頗るに混入する。

第13図115～118は土師器の坏で、116は須恵質に近い。115～117は円盤高台の底部を回転ヘラ切りによって切り離し、内外面にはナデ調整が施される。古代末（10世紀末～11世紀初頭）に属する。S

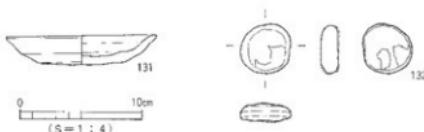


第15図 SR 8出土遺物（3）

R 8 が S D 3 と有機的に機能していた時代に堆積したものであると考えられる。115は焼成が良好で胎土は緻密で精製されている。色調は内外面ともに灰白色、断面が浅黄橙色を呈する。116は焼成が良好で堅固、胎土は緻密で精製されている。色調は外面が灰白色～灰黄褐色、内面が灰白色を呈する。117は S R 8 西側テラス（調査区の北壁断面）にて出土したもので、小型で薄い。焼成はやや甘く、全体的に摩滅が見られる。胎土は緻密で、胎土中に 1mm 以下の石英が疎らに混入する。色調は内外面ともに灰白色～浅黄橙色を呈する。118は土師器坏の口縁部片で、S R 8 西側テラス上層より出土した。器壁が薄く、口縁端部が若干膨らむ。胎土は緻密で精製されており、内外面には丁寧なナデ調整が施される。113、114 と同様、13世紀後半～14世紀初頭頃に属すると考えられる。



第16図 SR 8 出土遺物 (4)



第17図 SD 3出土遺物

## (2) 鉄器 (第14図119)

第14図119は断面が方形の鉄器で、流路の上層から出土した。その形状より釘であると考えられる。

## (3) 木製品 (第15図124)

第15図124は木製の杭である。素材にノグルミを用い、上部に自然面を有し下端部を尖らせる。

## 溝 SD 3 (第2図、第12図)

調査区東端の自然流路 (SR 8) に接続した状態で検出した溝で検出長約20.4mを測る。底部の勾配から判断して、東から南西に向けて流れていたと考えられる。溝の設置に伴ってSR 8の西側に改修を加え、SR 8内部に流れる水を内部に導いていたと考えられる。また、導水部付近が中州状を呈し周辺に礫の集中が見られることから、この場所に何らかの施設が設けられていた可能性が高い。SR 8テラス部における出土遺物より流路は遅くとも古代末には機能していたと考えられ、遅くとも中世後期には埋没したと考えられる。

## 出土遺物

## (1) 土器 (第17図131)

第17図131は下層より出土した土師器皿で、全體の約3分の2を欠損する。復元口径12.0cm、復元底径6.2cm、器高2.4cmを測り、内外面にナデ調整が施される。摩滅のため不明瞭であるが、底部を回転糸切りによって切り離すものと考えられ、11世紀中頃～12世紀代に属する。焼成は良好で胎土は緻密、胎土中に1mm以下の長石をわずかに混入する。色調は、内外面ともに灰白色を呈する。

## (2) 木製品 (第17図132)

第17図132は円盤状の木製品で、ツガ属を素材とする。SR 8との合流部付近の下層より出土した。

## 2. 中世～近世

中世～近世の遺構には掘立柱建物跡4棟、溝状遺構2条（S D 1、2）、自然流路5条（S R 1～S R 5）、土坑1基（S K 1）、粘土探査坑2基（探査坑1、2）がある。

### 掘立柱建物跡 掘立1（第12図、第19図）

調査区の東部、S R 8 及び S D 3に接する位置に検出した東西棟の建物跡で、円形の柱穴4基、方形の柱穴2基によって構成される。主軸をN-6°-Eにとる1間×2間の側柱建物で、規模は南北方向に3.2～3.6m、東西方向に約4mを測る。埋土は暗褐色灰土質上で、S P 2及びS P 3の埋土中より土師器の出土がみられた。切り合い関係より S D 3及びS R 8よりも新しい時期の建物で、出土遺物より13世紀以降の建物であると考えられる。

### 出土遺物（第23図133）

第23図133はS P 2の埋土中より出土した土師器の坏で、全体の約6分の1を残す小破片である。焼成は良好で胎土は緻密、色調は外面が淡黄色、内面が灰黄色を呈する。内外面にナデ調整を施し、底部を回転糸切りによって切り離す。13世紀代に属すると考えられる。

### 掘立柱建物跡 掘立2（第18図、第20図）

調査区の西側、S R 7上面にて検出した南北棟の側柱建物で、ほぼ同規模の建物である掘立3と並んだ状態にある。直径20cm前後を測る円形の柱穴6基によって構成される1間×2間の建物で、主軸をN-9°-Eにとる。規模は南北方向に約4m、東西方向に1.6～1.7mを測る。埋土は灰色粘土中に暗褐色細砂を混入するもので、柱痕部には暗灰色粘土（暗褐色泥）が堆積する。S P 11及びS P 13の埋土中より土師器坏及び羽釜の出土がみられた。切り合い関係より S R 7よりも新しい時期の建物で、出土遺物より13世紀後半～14世紀前半頃の建物であると考えられる。

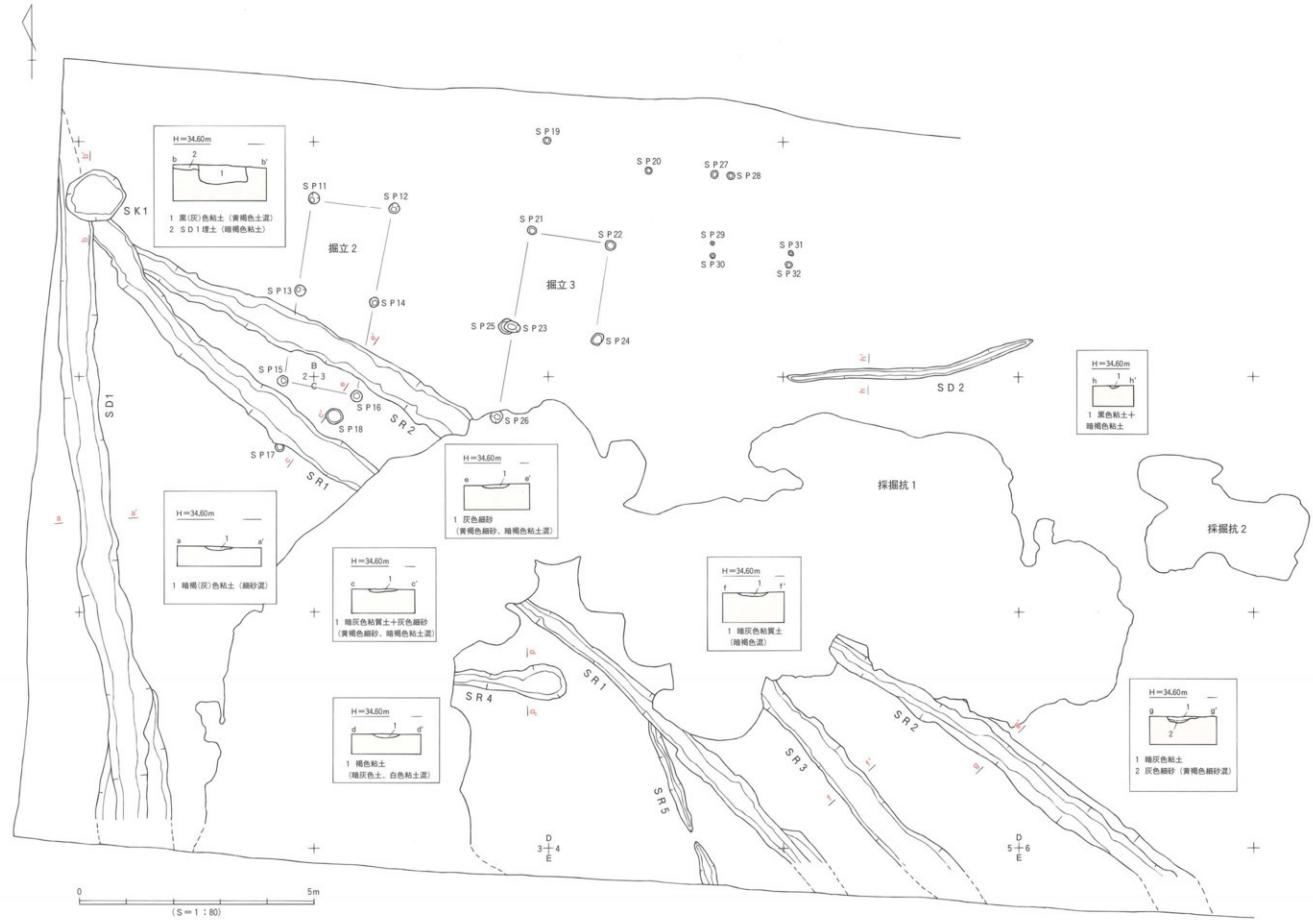
### 出土遺物（第23図134、135）

第23図134は土師器の坏で、回転糸切りによって切り離された底部表面に板状圧痕を残す。内外面に回転ナデ調整を施し、焼成は良好で胎土は緻密、胎土中に1～3mmの石英及び長石をわずかに混入する。復元口径が約12.1cm、復元底径が約7.9cm、器高が2.7cmを測り、全体の約3分の2を残存する。色調は、内外面ともに灰白色を呈する。13世紀代に属すると考えられる。

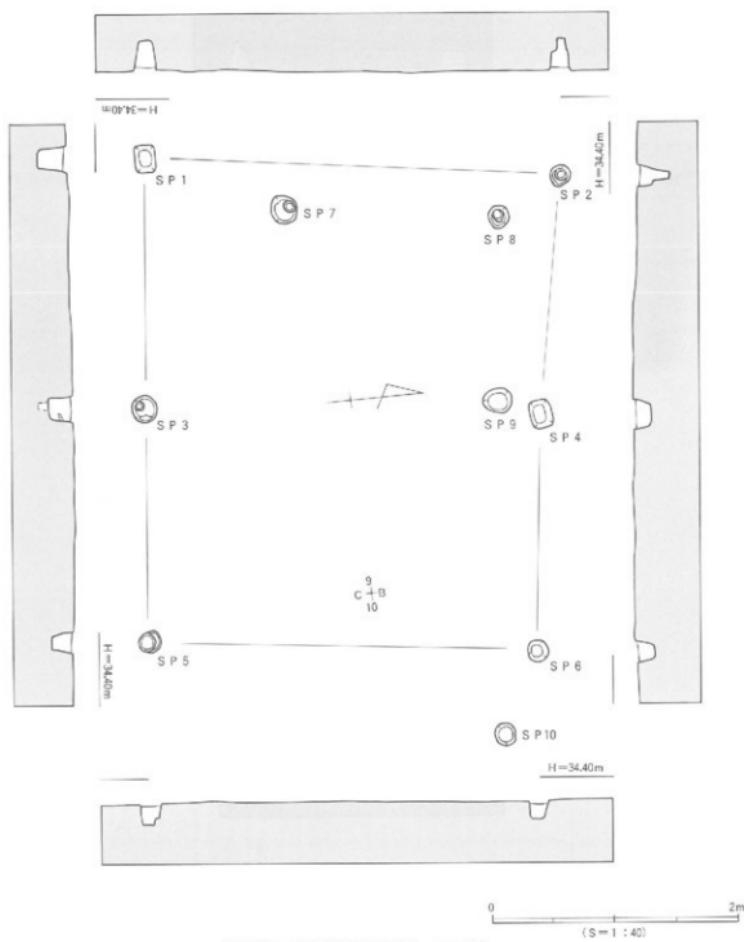
第23図135は瓦質の羽釜で、口縁端部よりやや下がった位置に鏽をめぐらせる。4×8cmほどの小破片で、推定復元口径が約27.8cmを測る。焼成は良好で胎土は緻密、胎土中に1mm前後の長石及び石英を疎らに含む。色調は外面が暗灰色、内面が黄灰色を呈する。13世紀後半～14世紀前半に属する。

### 掘立柱建物跡 掘立3（第18図、第21図）

調査区の西側、S R 7上面にて検出した南北棟の建物で、掘立2の東側約3m離れた位置に並んだ状態で検出した。直径20～30cmを測る円形の柱穴6基によって構成される1間×2間の建物であるが、南東隅の柱穴は探査坑1によって削られる。主軸をN-10°-Eにとる南北棟の建物で、規模は南北方向に約4m、東西方向に1.7～1.8mを測る。埋土は掘立2と同様、灰色粘土中に暗褐色細砂を混入するもので、柱痕部には暗灰色粘土（暗褐色泥）が堆積する。S P 22の埋土中からの出土遺物として底部に回転糸切り痕を有する土師器坏がある。切り合い関係より S R 7よりも新しく、探査坑1より



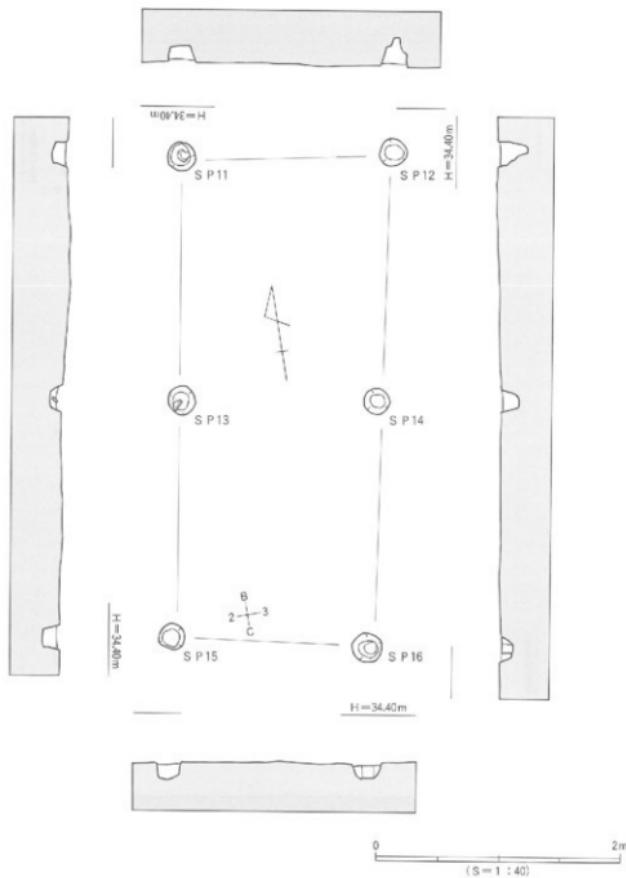
第18図 調査区西半部遺構測量図 (SR 7以外) (S = 1 : 80)

第19図 掘立 1測量図 ( $S = 1 : 40$ )

古い時期の建物である。出土遺物及び埋土の特徴、建物の配置などより掘立 2 と同時並存した可能性が高く、13世紀後半～14世紀前半頃の建物であると考えられる。

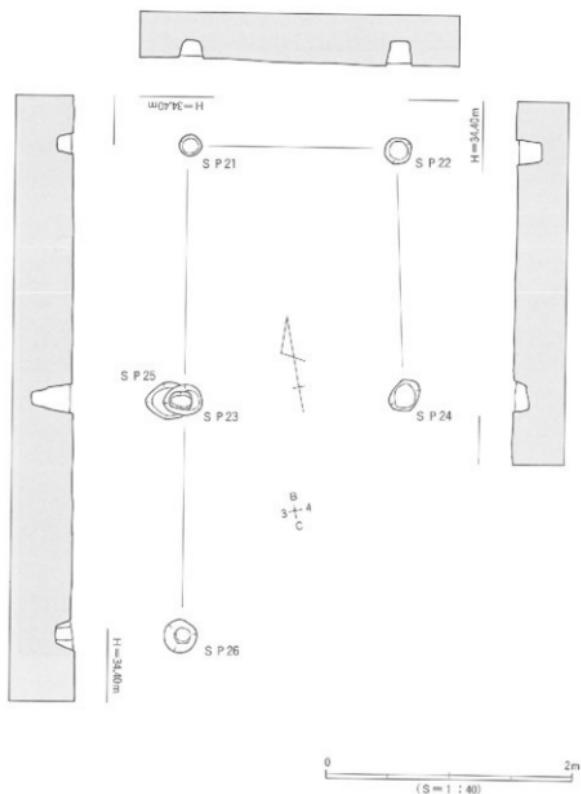
#### 出土遺物

S P 22 の埋土中より底部を回転糸切りによって切り離す土師器の壊が出土しているが、小片のため固化に耐えない。

第20図 挖立2測量図 ( $S = 1 : 40$ )

## 掘立柱建物跡 挖立4（第12図、第22図）

調査区の東側、掘立1の西側約2.4m離れた位置に並行した状態で検出した。南北棟の建物跡で、不整円形の柱穴3基、隅丸方形状の柱穴1基によって構成される。主軸をN-7°-Eにとる1間×1間の側柱建物で、規模は南北方向に3.8~4m、東西方向に2.1~2.3mを測る。埋土は掘立1同様、暗褐色粘質土で、遺物の出土はない。埋土の特徴、建物の配置状況より掘立1と同時並存した可能性が高く、13世紀以降の建物であると考えられる。

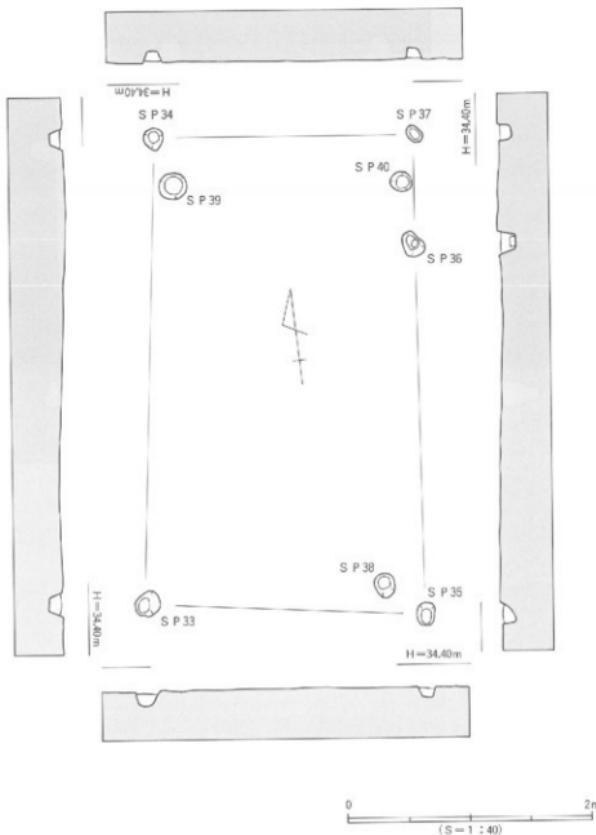
第21図 掘立3測量図 ( $S = 1:40$ )

## 溝 SD1 (第18図)

調査区西側で自然流路 (SR7) の上面にて検出した遺構で、検出長約15mを測る。検出時の幅が64cm～1.6mを測り、南北方向にはほまっすぐ延びる。埋土は上層が暗灰色～灰色細砂、下層が暗褐(灰)色粘土内に細砂を混入するもので、深さは地点によって大きく異なり2cmの所もあれば10～70cmまで様々である。切り合ひ関係よりSR7より新しく、SR1及びSK1よりも古い時期の遺構で、出土遺物より13世紀後半～14世紀代に機能していたと考えられる。

## 出土遺物 (第23図136～141)

第23図136は土師器の高坏で坏部と脚部の接合部が分厚い。摩滅のため詳細は不明であるが、脚部外面にハケ目調整の後にナゲ調整を施すと考えられる。焼成は良好で胎土は密、胎土中に2mm以下の

第22図 挖立4測量図 ( $S = 1 : 40$ )

石英を多く含む。色調は外面が淡黄色、内面が浅黄色を呈する。

137～139は土師器の坏で、底部を回転糸切りによって切り離す。137は器面調整の仕上げ段階に口縁部の先端付近にナデ調整を加えて、上半が内側に折れ曲がった形状をする。復元口径が約13.0cm、復元底径が約6.0cm、器高4.8cmを測り、焼成は良好で胎土は緻密である。色調は外面が淡赤橙色及び灰色、内面が灰褐色を呈する。口縁部の特徴より14世紀中頃に属すると考えられる。138は精製された胎土を持つ灰白色の坏で、焼成は良好で堅固、内外面ともに丁寧なナデ調整が施される。口縁部の約3分の1を欠損するがほとんど完形品で、口径10.9cm、底径5.9cm、器高3.6cmを測る。13世紀後半～14世紀初頭に属すると考えられる。139は底径が5.7cmを測る坏の底部で、体部外表面及び底部内面に同心円状の凹みが残る。焼成は良好で胎土は緻密、色調は外面が黄灰色～灰色、内面が灰黄褐色を呈

する。14世紀に属するものと考えられる。

140及び141は羽釜で、140は瓦質、141は土質である。141は口縁端部よりかなり下がった位置に鋤を持つタイプで、口縁部の約4分の1を遺存する。復元口径が約24.4cmを測る個体で、13世紀後半～14世紀前半に属すると考えられる。

#### 溝 S D 2 (第18図)

調査区ほぼ中央部、北寄りの位置に検出した遺構で、検出長約5.3mを測る。検出時の幅が16～24cmを測り、東西に短くのびる。埋土は黒色粘土内に暗褐色粘土を混入するもので、深さは5cm以下を測る非常に浅いものである。切り合い関係から S R 7 より新しい時期の遺構であることが判明している。遺物の出土はない。古代末以降に属する。

#### 自然流路 S R 1 (第18図)

調査区北西端部から南壁に向かって S R 2 と一部重複した状態で検出した流路で、検出長約21mを測る。埋土は暗灰色粘質土中に灰色細砂を混入するもので、黄褐色細砂及び暗褐色粘土をわずかに含む。流路の幅は検出時で28～80cm、深さは1～14cmを測る。切り合い関係より S D 1 及び S K 1 、採掘坑1よりも古く、 S R 2 、 S R 5 及び S R 7 より新しい時期の遺構であることが判明している。遺物の出土はない。古代末～中世後期に属すると考えられる。

#### 自然流路 S R 2 (第18図)

調査区北西端部から南壁中央に向かって流れる流路で、検出長が約26.8m、幅が44～86cm、深さが1～13cmを測る。埋土は上層が暗灰色粘土、下層が灰色細砂中に黄褐色細砂及び暗褐色粘土を混入する。切り合い関係から S R 1 及び採掘坑1よりも古く、 S R 7 より新しい時期の遺構で古代末～中世後期に属すると考えられる。遺物の出土はない。

#### 自然流路 S R 3 (第18図)

調査区中央付近、南壁際で S R 1 と S R 2 に挟まれた状態で検出した。検出長が約6m、幅が46～84cm、深さが1～6cmを測る。埋土は暗灰色粘質土中に暗褐色土を混入するもので、切り合い関係から採掘坑1よりも古い時期の遺構で、出土遺物より11世紀以降に属すると考えられる。

#### 出土遺物 (第23図142、143)

第23図142は円盤高台の底部を有する土師器の壺で、底部の約4分の1を遺存する。焼成は良好で胎土は緻密、色調は外面が灰白色～橙色、内面が橙色を呈する。古代末（10世紀末～11世紀初頭）に属すると考えられる。143は内黒の黒色土器で、摩滅が著しく詳細は不明であるが、内面にミガキ調整を施した痕跡がわずかに残る。復元口径が約12.0cmを測り、11世紀代に属すると考えられる。焼成は良好、胎土は密で胎土中に1mm以下の石英及び金雲母を疎らに混入する。色調は外面が黄灰色から浅黄色、内面が暗灰色を呈する。

#### 自然流路 S R 4 (第18図)

調査区の西側で採掘坑1に切られる形で検出した。検出長が約2.4mと短く、幅が20～76cm、深さが3～7cmを測る。埋土は褐色粘土中に暗灰色土及び白色粘土を混入するもので、切り合い関係から

探査坑1よりも古い。遺構の時期は近世以前で、出土遺物はない。

#### 自然流路 S R 5 (第18図)

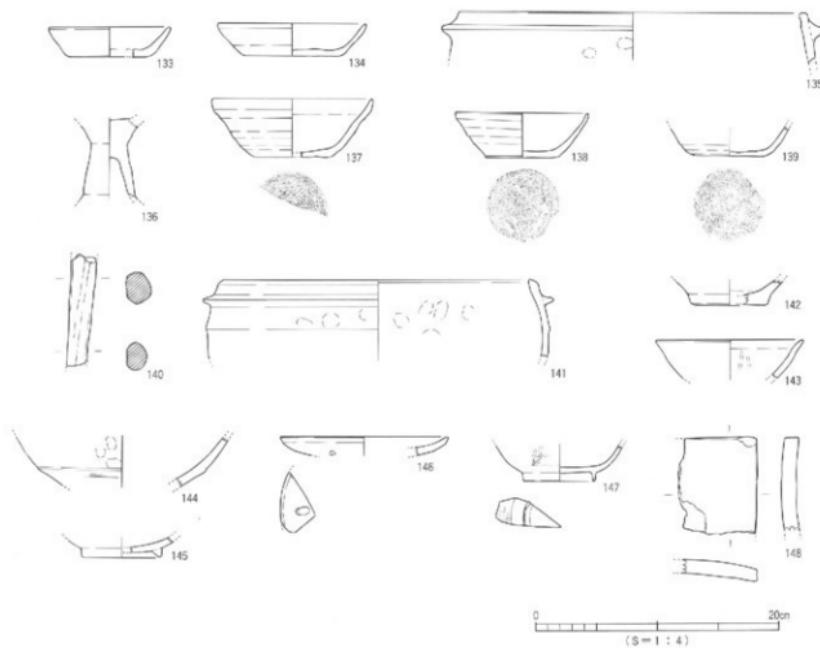
調査区の中央部南崖際で検出した細長い流路で、検出長が約3.6m、幅が16~34cm、深さが1~6cmを測る。埋土は灰色細砂内に黄灰色土を混入するもので、切り合ひ関係からS R 1よりも古い。古代末~中世後期に属すると考えられるが、出土遺物はない。

#### 土坑 S K 1 (第18図)

調査区北西部で検出した遺構で、平面形態が直径約1.1~1.3mの円形を呈し、壁面が底部から直立気味に立ち上がる。深さ33~45cmを測り、埋土中には黒(灰)色粘土内に黄褐色土が混ざったものが堆積する。切り合ひ関係からSD 1、SR 1及びSR 7よりも新しい時期の遺構で、出土遺物より近世に属する。

#### 出土遺物 (第23図144~148)

第23図144は土師器高坏の坏部で古墳時代中期頃に属する。焼成は良好、胎土は緻密で胎土中に1



第23図 挖立1・2、SD 1、SR 3、SK 1出土遺物

mm以下の石英及び金雲母をわずかに混入する。色調は内外面ともに、にぶい黄橙色を呈する。145は内墨の黒色土器の底部で、復元径約6.2cmを測る底部に輪高台が貼り付けられる。内面にミガキ調整を施した痕跡がわずかに残る。焼成は良好で胎土は緻密、胎土中に1mm以下の長石をわずかに混入する。色調は外面が灰白色、内面が暗灰色を呈する。10世紀末～11世紀前半頃に属すると考えられる。

146は唐津系肥前陶磁の丸皿で、復元口径が約13.8cmを測る。焼成は良好で堅固、胎土は緻密で、色調は外面が灰白色、内面がにぶい橙色を呈し、口縁端部に灰オリーブ色の釉薬が施される。体部外面上に窯道具の痕跡が残り、17世紀前半頃に属すると考えられる。147は染付の碗で、高台の作りが薄い。見込みには文様はなく、高台内に銘が入るが文字は特定できない。17世紀代に属すると考えられる。148は薄手の瓦で、屋根の棟を覆う慰斗瓦である可能性が高い。凸面にハケ目工具を用いたナデ調整の痕跡、凹面及び端部に工具で切り取った時に生じたと考えられる擦痕が残る。

#### 粘土探掘坑 採掘坑1（第18図）

調査区西半部で検出した不規則な形状の土坑で、複数の土坑が複雑に切り合う。調査に際しては同一時期（近世以降）に属する造構の集合体と捉え、近現代坑（いわゆる撥乱）として括した調査を行った。埋土に様々な種類、色調の土を複雑に混入し、調査区内に堆積する良質な粘土を求めて繰り返し掘り下げられたと考えられる。出土遺物より近世に属する。

#### 出土遺物（第24図149～169）

第23図149～161は羽釜で156は瓦質、他は土師質である。149～157は口縁部で149、150は端部に鋸をめぐらせるもの、151及び157は少し下がった位置に鋸をめぐらせるもの、152～156はかなり下がった位置に鋸をめぐらせるものである。158～161は脚部で、内外面に丁寧なナデ調整が施される。

162は円盤状の土製品で、梢円形の長径が4.04cm、短径が3.6cmを測る。厚さが最大1.22cm、重さが約22.6gを測り、側縁部の5ヶ所に刻み目が入る。両面に丁寧なナデ調整が施されており、色調は表面が褐灰色、断面が灰白色を呈する。

163～166は土師器の皿、坏で底部を回転糸切りにより切り離す。特に165及び166には板状の圧痕が残る。色調は163及び164が灰白色、165が浅赤橙色、166が浅黄橙色を呈する。163及び166は胎土が緻密で、特に丁寧に作られている。14世紀後半に属すると考えられる。

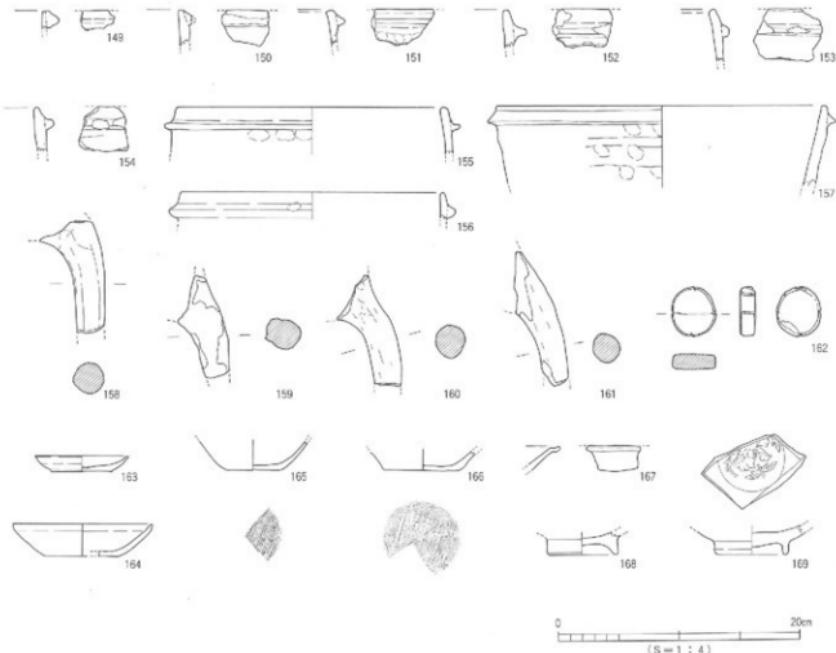
167は唐津系肥前陶磁の溝縁皿で、外反する口縁端部内面に溝をめぐらせる。色調は土見せ部分がにぶい橙色、断面が灰白色を呈し、口縁部周辺に灰オリーブ色の釉薬がかかる。底部は無釉で、17世紀前半に属する。

168は灰白色的精製された土を素材とする陶器碗で、高台を含め内外面全体に淡黄色の釉が施される。高台下部には胎土目積みの痕跡が3ヶ所残る。

169は外底部の釉を輪形に削りとる龍泉窯系の青磁蓮弁文碗で、見込み部に花卉文が印刻される。13世紀後半～14世紀代に属すると考えられる。

#### 粘土探掘坑 採掘坑2（第18図）

調査区中央で検出した不規則な形状の土坑で、採掘坑1の東隣において検出した。採掘坑1と一連の造構である可能性が高く、採掘坑1同様、埋土に様々な種類、色調の土を複雑に混入する。内部より遺物の出土はみられなかった。時期は近世に属すると考えられる。



第24図 掘堀坑1出土遺物

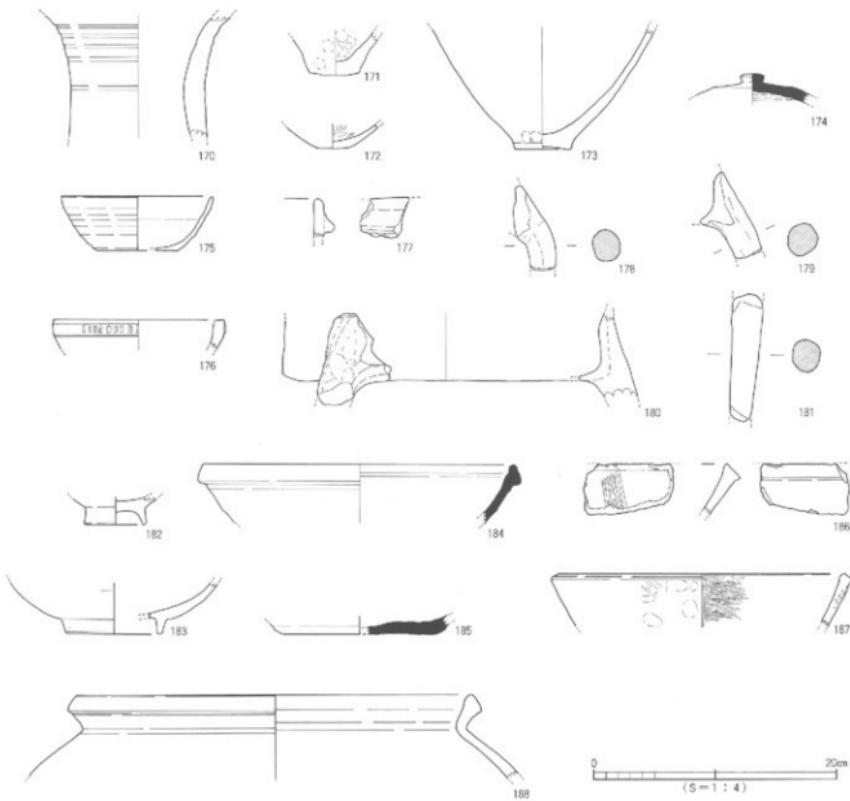
### 3. 表土および包含層出土遺物

#### (1) 土器 (第25図170～188)

第25図170は壺形土器の頭部で、焼成がやや甘くその為摩滅が著しい。外面に凹線を数条施すもので、現状では5条確認できる。色調は外面がにぶい黄橙色、内面がにぶい黄橙色～褐灰色を呈する。弥生時代中期後半～後期前半に属するものである。

171～173は壺あるいは壺形土器の底部で、弥生時代後期後半～終末に属する。171は底部が小さく突き出るもので、内外面に雜なナデ調整を施す。焼成は良好、胎土は密で胎土中に2mm以下の石英及び長石をわずかに混入する。色調は外面が灰白色、内面がにぶい黄橙色を呈する。172は外面にナデ調整を施す丸底の底部で、内面にハケ目調整の痕跡が残る。焼成は良好で胎土は密、胎土中に1mm前後の石英及び金雲母を混入する。173は底部を指でつまみ出すことによってわずかに高台状にする壺形土器で、内外面にハケ目調整を施した後にナデ調整を施す。焼成は良好であるが胎土は粗く、胎土中に1～2mmの石英及び長石を多く含む。色調は外面が橙色～浅黄橙色、内面が黄橙色および灰褐色を呈する。

174は宝珠形つまみを持つ須恵器の坏蓋で、7世紀前半頃に属する。胎土は緻密で焼成は甘い。色調は外面が灰赤色～赤灰色、内面が灰白色を呈する。



第25図 表土～包含層出土遺物（1）

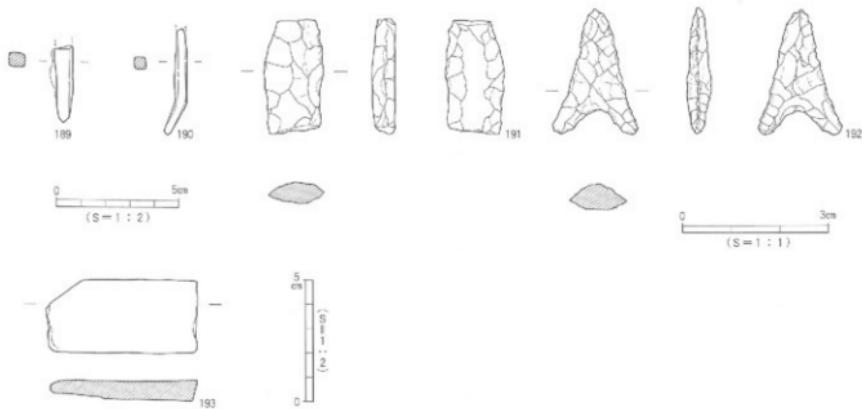
175は内外面に回転ナデ調整を施す土師器の坏で、調整の仕上げ段階に口縁の先端にナデ調整を加える。焼成は良好で胎土は緻密、色調は内外面ともに灰白色を呈する。14世紀後半頃に属すると考えられる。

176は土師器の香炉で端部外面に2本の沈線による区画を設け、その内部に長方形のスタンプ文を連続して施す。口縁端部に平坦面を有する坏で、器壁は分厚く復元口径が13.8cmを測る。焼成は良好で胎土は緻密、色調は内外面ともに浅黄橙色を呈する。16世紀以降のものと考えられる。

177～181は羽釜で177は瓦質、他は土師質である。胎土は密で、内外面には丁寧なナデ調整が施される。13世紀以降に属する。

182は胎土に目の細かい灰白色の土を用いる陶器碗で、高台を含め外面全体に淡黄色の釉が施される。高台の内側に1ヶ所だけ窯道具の痕跡がのこる。

183は陶器鉢の底部で、遺存部の外面上部に白土を用いた装飾が横方向に施される。胎土は暗褐



第26図 表土～包含層出土遺物（2）

色～赤灰色を呈し、内面に暗青灰色の釉がかかる。

184、185は束縛系のこね鉢で184は口縁部、185は底部の破片資料である。184は口縁端部が上方にやや拡張するもので13世紀前半頃に属すると考えられる。焼成は良好で胎土は緻密、色調は内外面ともに灰白色を呈し、口縁端部外面のみ自然釉付着のため暗オリーブ灰色を呈する。185は底部に回転条切り痕を有し、内外面ともに暗めの灰色を呈する。焼成は良好であるが胎土は粗く、1mm以下の砂粒を多く混入する。

186は備前焼のすり鉢で、内面におろし目が入りわずかに口縁部の拡張がみられる。焼成は良好で胎土は密、色調は内外面ともに灰色、断面が灰白色を呈する。13世紀末～14世紀初頭頃に属すると考えられる。

187は口縁端部が強いナデにより凹む瓦質のすり鉢である。細かいハケ目調整を施した内面におろし目が1本だけ確認できる。焼成は良好で胎土は緻密、色調は内外面ともに灰白色を呈する。

188は上部質の壺形土器で、端部を肥厚させた口縁部が短く立ち上がる。内外面を強い横ナデによって整形し、特に仕上げ段階で口縁端部内面に強い横ナデが施される。焼成は良好、胎土は密で胎土中に3mm以下の石英及び長石を少量混入する。色調は内外面ともに褐灰色を呈し、断面がにぶい橙色を呈する。

#### （2）鉄器（第26図189、190）

第26図189及び190は釘で、190は端部が折れ曲がる。

#### （3）石器（第26図191～193）

第26図191及び192は绳文時代に属する打製石器である。191は風化が著しく不明であるが、192はサスカイト質の石材を利用している。

193は粘板岩製の砥石で灰白色を呈し、裏面は剥離により欠損する。

# 第V章 自然科学分析

株式会社 古環境研究所

## 1. はじめに

木材は、セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり、解剖学的形質の特徴から概ね属レベルの同定が可能である。木材は花粉などの微化石と比較して移動性が少ないとことから、比較的近隣の森林植生の推定が可能であり、遺跡から出土したものについては木材の利用状況や流通を探る手がかりとなる。

## 2. 試料

試料は、古代末に設けられた水路である S D 3、弥生時代～古墳時代後期に流れ埋没した S R 7 および、弥生時代～古墳時代後期及び古代末に流れ古代末～中世前期にかけて埋没した自然流路の S R 7 および S R 8 から採取された計20点の木材である。

## 3. 方法

カミソリを用いて新鮮な基本的三断面（木材の横断面、放射断面、接線断面）を作成し、生物顕微鏡によって60～600倍で観察した。同定は解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

## 4. 結果

結果を表1に示し、主要な分類群の顕微鏡写真を示す。以下に同定根拠となった特徴を記す。

### モミ属 *Abies* マツ科 (第27図1)

仮道管と放射柔細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行は比較的緩やかである。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は小型のスキ型で1分野に1～4個存在する。放射柔細胞の壁が厚く、じゅず状末端壁を有する。

接線断面：放射組織は單列の同性放射組織型である。

以上の形質より、モミ属に同定される。モミ属は日本に5種が自生し、その内ウラジロモミ、トドマツ、シラビソ、オオシラビソの4種は亜寒帯に分布し、モミは温帯を中心に分布する。常緑高木で高さ45m、径1.5mに達する。材は保存性が低く軽軟であるが、現在では多用される。

### ツガ属 *Tsuga* マツ科 (第27図2)

仮道管、樹脂細胞、放射柔細胞及び放射仮道管から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行は急である。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔はスキ型でややヒノキ型の傾向を示し、1分野に2～4個存在する。放射仮道管が存在し、その壁には小型の有縁壁孔が存在する。樹脂細胞が存在する。

接線断面：放射組織は單列の同性放射組織型である。

以上の形質より、ツガ属に同定される。ツガ属には、ツガ、コメツガがあり、福島県以南の本州、四国、九州に分布する。常緑高木で通常高さ20～25m、径50～80cmである。材は耐朽、保存性中庸で、建築、器具、土木、薪炭などに用いられる。

マツ属複維管束亜属 *Pinus subgen. Diploxylon* マツ科 (第27図3)

仮道管、放射柔細胞、放射仮道管及び垂直、水平樹脂道を取り囲むエピセリウム細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行は急で、垂直樹脂道が見られる。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は窓状である。放射仮道管の内壁には鋸歯状肥厚が存在する。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型であるが、水平樹脂道を含むものは紡錘形を呈する。

以上の形質より、マツ属複維管束亜属に同定される。マツ属複維管束亜属にはクロマツとアカマツがあり、北海道南部、本州、四国、九州に分布する常緑高木である。材は水湿によく耐え、広く用いられる。

スギ *Cryptomeria japonica* D.Don スギ科 (第28図4)

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行はやや急で、晩材部の幅が比較的広い。樹脂細胞が見られる。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は典型的なスギ型で、1分野に2個存在するものがほとんどである。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型で、10細胞高以下のものが多い。樹脂細胞が存在する。

以上の形質より、スギに同定される。スギは本州、四国、九州、屋久島に分布する。日本特産の常緑高木で、高さ40m、径2mに達する。材は軽軟であるが強靭で、広く用いられる。

コウヤマキ *Sciadopitys verticillata* Sieb. et Zucc. コウヤマキ科 (第28図5)

仮道管と放射柔細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行は比較的急で、晩材部の幅は狭い。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は窓状である。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型で、10細胞高以下のものが多い。

以上の形質より、コウヤマキと同定される。コウヤマキは福島県以南の本州、四国、九州に分布する。日本特産の常緑高木で、通常高さ30m、径80cmに達する。材は木理通直、肌目緻密で強靭、耐朽、耐湿性も高い。特に耐水湿材として用いられる。

ヒノキ *Chamaecyparis obtusa* Endl. ヒノキ科 (第28図6)

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行はゆるやかで、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞が見られる。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔はヒノキ型で、1分野に2個存在するものがほとんどである。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型で、1~15細胞高である。

以上の形質より、ヒノキに同定される。ヒノキは福島県以南の本州、四国、九州、屋久島に分布する。日本特産の常緑高木で、通常高さ40m、径1.5mに達する。材は木理通直、肌目緻密で強靭、耐朽、耐湿性も高い。良材であり、建築など広く用いられる。

ノグルミ *Platycarya strobilacea* Sieb. et Zucc. クルミ科 (第29図7)

横断面：年輪のはじめに、やや大型の道管が1~数列配列する環孔材である。晩材部では角張った小道管が複合して斜線状に配列する。早材部から晩材部にかけて道管の径は急激に減少す

る。軸方向柔細胞が接線状に配列する。

放射断面：道管の穿孔は單穿孔である。放射組織は平伏細胞と方形細胞からなる異性である。

接線断面：放射組織は異性放射組織型で、1～5細胞幅である。

以上の形質より、ノグルミに同定される。ノグルミは本州（東海地方以西）、四国、九州に分布する落葉高木で、通常高さ20m、径60cm程度である。現在では建築、器具、経木、薪炭、マッチ軸木などに用いられる。

#### クリ *Castanea crenata Sieb. et Zucc.* ブナ科（第29図8）

横断面：年輪のはじめにきわめて大型の道管が数条配列する環孔材である。晩材部では小道管が火状に配列する。早材から晩材にかけて道管の径は急激に減少する。

放射断面：道管の穿孔は單穿孔である。放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型である。

以上の形質より、クリに同定される。クリは北海道の西南部、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木で、通常高さ20m、径40cmぐらいであるが、大きいものは高さ30m、径2mに達する。耐朽性強く、水湿によく耐え、保存性の極めて高い材で、現在では建築、家具、器具、土木、船舶、彫刻、薪炭、椎茸ほだ木など広く用いられる。

#### ヤマガワ *Morus australis Poiret* クワ科（第29図9）

横断面：年輪のはじめにやや大型の丸い道管が、単独あるいは2～3個複合して配列する環孔材である。孔圈部外の小道管は複合して円形の小塊をなす。道管の径は徐々に減少する。

放射断面：道管の穿孔は單穿孔で、小道管の内側にはらせん肥厚が存在する。放射組織はほとんどが平伏細胞であるが、上下の縁辺部の1～3細胞ぐらいは直立細胞である。

接線断面：放射組織は上下の縁辺部が直立細胞からなる異性放射組織型で、1～6細胞幅である。小道管の内側にはらせん肥厚が存在する。

以上の形質より、ヤマガワに同定される。ヤマガワは北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉高木で、通常高さ10～15m、径30～40cmである。材は堅硬、韧性に富み、建築などに用いられる。

#### センダン *Melia azedarach L. var. subtripinnata Miq.* センダン科（第30図10）

横断面：年輪のはじめに大型の道管が配列する環孔材である。孔圈部外の道管は単独または2～3個複合して散在し、年輪界付近の小道管は群状に複合する。道管の径は徐々に減少する。

放射断面：道管の穿孔は單穿孔で、小道管の内側にらせん肥厚が存在する。放射組織は平伏細胞である。

接線断面：放射組織は同性放射組織型で、1～4細胞幅である。小道管の内側にはらせん肥厚が存在する。

以上の形質より、センダンに同定される。センダンは四国、九州に分布する。落葉の高木で、高さ30m、径1mに達する。材は強さ中庸で、建築、家具、器具などに用いられる。

#### ノブドウ属 *Ampelopsis* ブドウ科（第30図11）

横断面：大型から中型の丸い道管が、ほぼ単独で年輪のはじめに配列する環孔材である。孔圈部外では、やや角張った小道管が、単独あるいは数個複合してまばらに散在する。早材部から

晩材部にかけて道管の径は急激に減少する。

放射断面：道管の穿孔は單穿孔である。放射組織は異性で、道管と放射組織間との壁孔は階段状である。

接線断面：放射組織は異性放射組織型で、6細胞幅程度であるが、高さは3mmを越える。道管相互の壁孔は階段状である。

以上の形質より、ノブドウ属に同定される。ノブドウ属には、ノブドウ、ウドカズラがあり、北海道、本州、四国、九州、沖縄に分布する落葉の蔓性植物である。

## 5. 所見

分析の結果、ヒノキ6点、マツ属複雑管束型3点、モミ属2点、コウヤマキ2点、ツガ属1点、スギ1点、ノグルミ1点、クリ1点、ヤマグワ1点、センダン1点、ノブドウ属1点が同定された。いずれの樹種も西南日本の暖温帯の照葉樹林域に生育する樹種である。

ヒノキが最も多く利用されており、主要な用材であったと考えられる。これは近畿地方中央部から瀬戸内沿岸地域の古墳時代以降における傾向であり、木材が流通によりもたらされた可能性が示唆される。

### 【文献】

佐伯浩・原田浩（1985）針葉樹材の細胞、木材の構造、文永堂出版、p.20-48

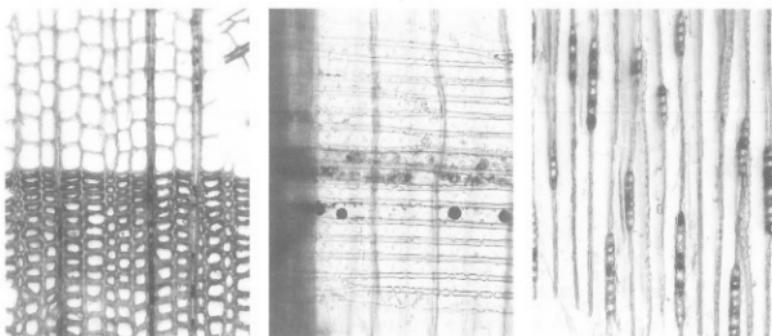
佐伯浩・原田浩（1985）広葉樹材の細胞、木材の構造、文永堂出版、p.49-100

島地謙・伊東隆夫（1988）日本の遺跡出土木製品総覧、雄山閣、p.296

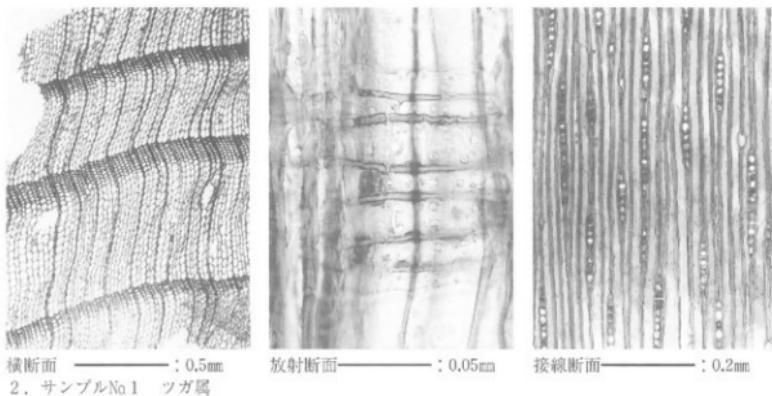
山田昌久（1993）日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成、植生史研究特別第1号、植生史研究会、p.242

表1 桑原遺跡5次調査地出土木製品の樹種同定結果

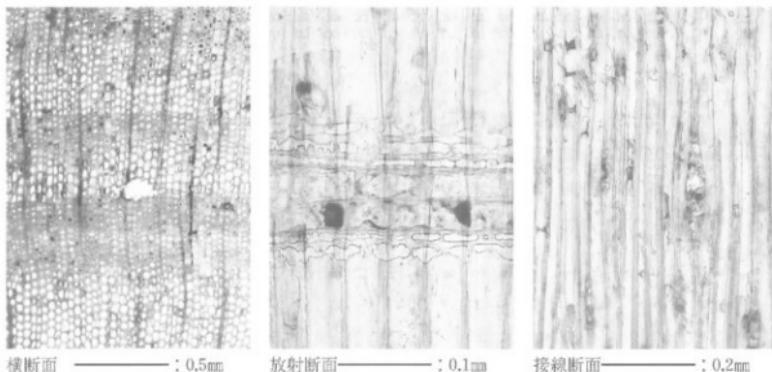
試料No	図面・遺物番号	出土遺構・層位	結果(学名)	(和名)
1	第17図・132	S D 3 (C 10)・下層	Tsuga	ツガ属
2	第8図・74	S R 7・下層	Chamaecyparis obtusa Endl.	ヒノキ
3	図面なし	S R 7 (B 4)・下層	Ampelopsis	ノブドウ属
4	第9図・80	S R 7・下層	Abies	モミ属
5	第8図・73	S R 7・下層	Pinus subgen. Diploxyylon	マツ属複雜管束亞属
6	第9図・82	S R 7・下層	Abies	モミ属
7	第8図・75	S R 7・下層	Sciadopitys verticillata Sieb. et Zucc.	コウヤマキ
8	第8図・72	S R 7・下層	Pinus subgen. Diploxyylon	マツ属複雜管束亞属
9	図面なし	S R 7・下層	Sciadopitys verticillata Sieb. et Zucc.	コウヤマキ
10	第8図・76	S R 7・下層	Melia azedarach L. var. Subiripinnata Miq.	センダン
11	第8図・78	S R 7・下層	Morus australis Point	ヤマグワ
12	第9図・83	S R 7・下層	Chamaecyparis obtusa Endl.	ヒノキ
13	第9図・84	S R 7・下層	Cryphomeria japonica D. Don	スギ
14	第15図・127	S R 8・下層	Pinus subgen. Diploxyylon	マツ属複雜管束亞属
15	第16図・129	S R 8 (E 9)・下層	Chamaecyparis obtusa Endl.	ヒノキ
16	第16図・130	S R 8 (B 10)・下層	Chamaecyparis obtusa Endl.	ヒノキ
17	第15図・125	S R 8・下層	Chamaecyparis obtusa Endl.	ヒノキ
18	第15図・124	S R 8 (D 9)・上層	Platycarya strobilacea Sieb. et Zucc.	ノグルミ
19	第15図・126	S R 8・下層	Castanea crenata Sieb. et Zucc.	クリ
20	第9図・81	S R 7・下層	Chamaecyparis obtusa Endl.	ヒノキ



横断面———：0.2mm  
1. サンプルNo 4 モミ属



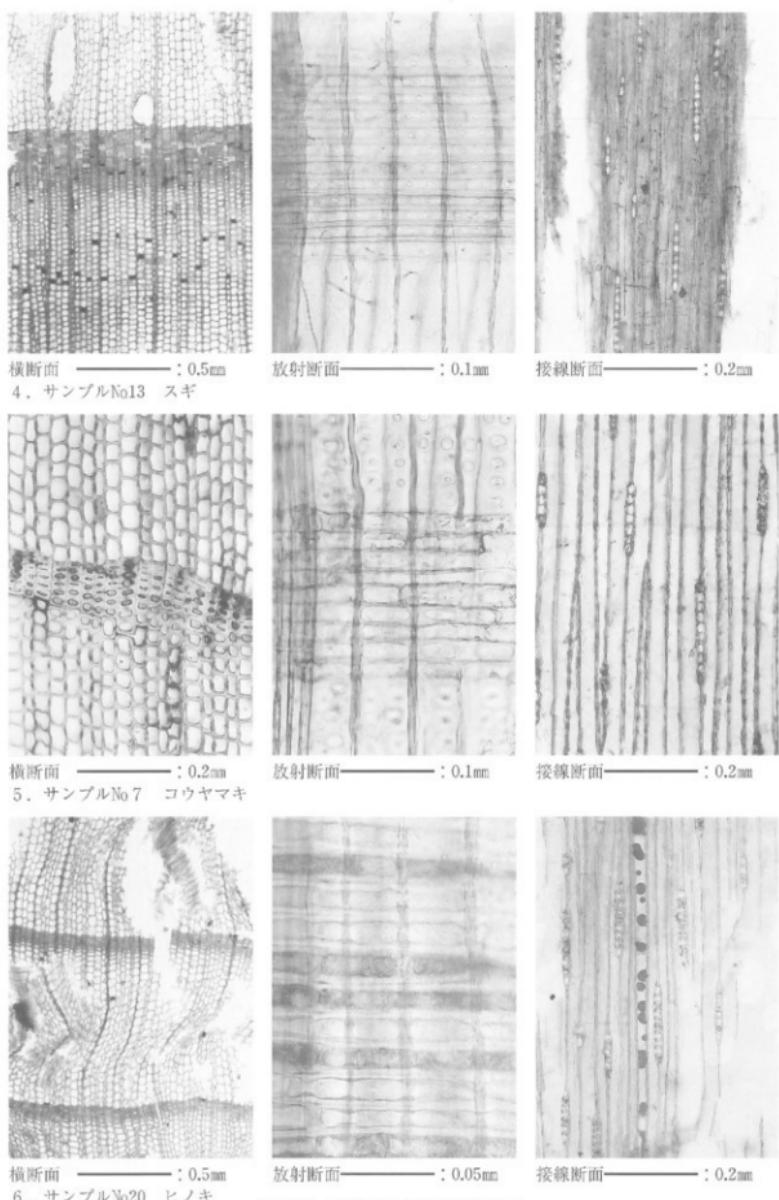
横断面———：0.5mm  
2. サンプルNo 1 ツガ属



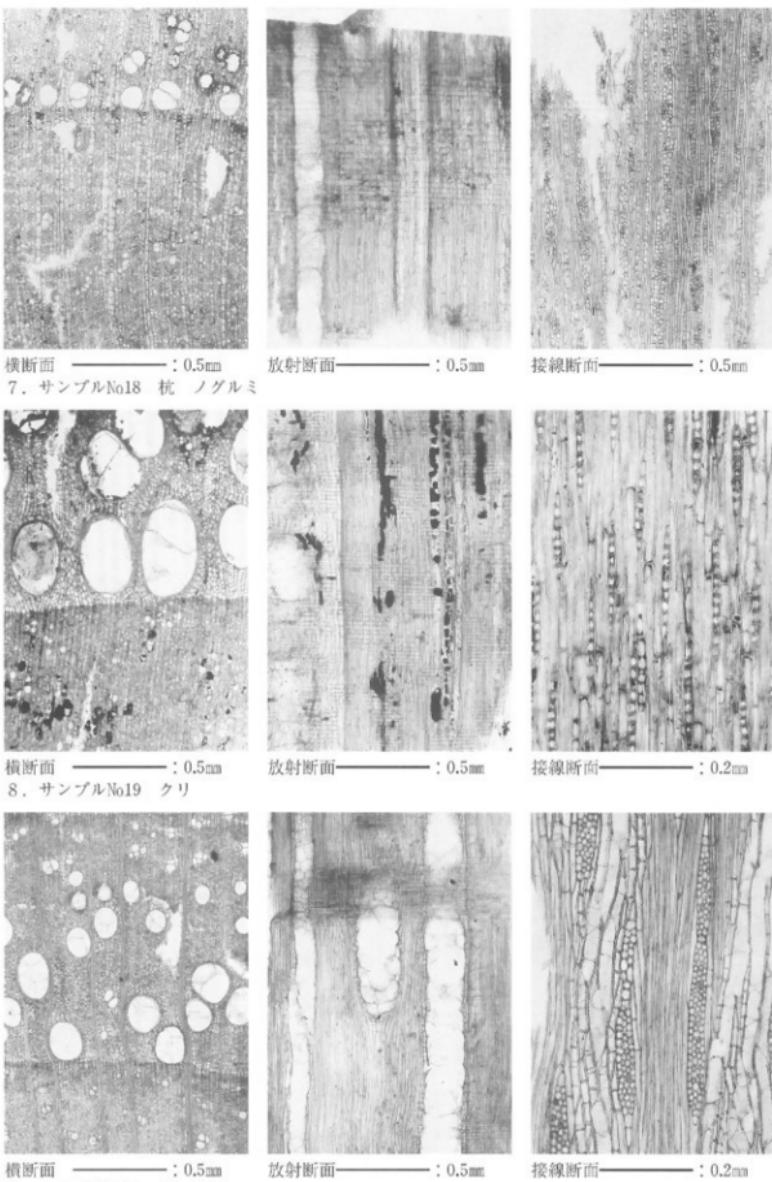
横断面———：0.5mm 放射断面———：0.1mm 接線断面———：0.2mm  
3. サンプルNo14 マツ属複維管束亞属

第27図 桑原遺跡 5次調査の木材 I

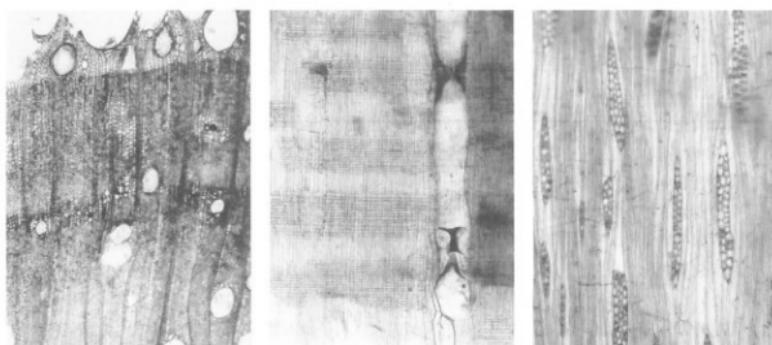
樹種同定



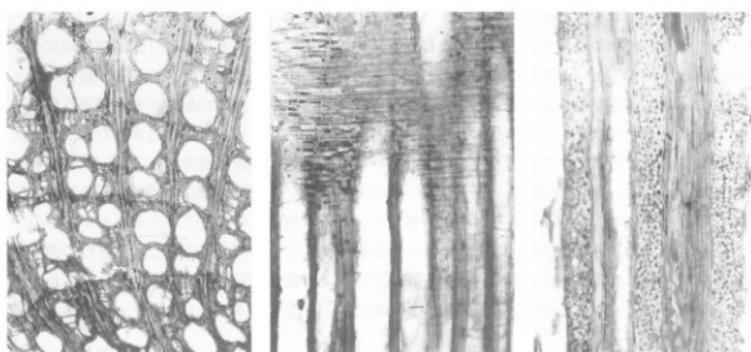
第28図 桑原遺跡 5次調査の木材 II



第29図 桑原遺跡 5次調査の木材 III



横断面 放射断面 接線断面  
10. サンプルNo10 センダン



横断面 放射断面 接線断面  
11. サンプルNo 3 ノブドウ属

## 第VI章 調査の成果と課題

今回の調査によって、弥生時代～古代に流れた自然流路2条（S R 7、8）と古代末の溝1条（S D 3）、中世前期の掘立柱建物跡4棟（掘立1～4）、溝1条（S D 1）、古代末～中世後期の自然流路5条（S R 1～5）、溝1条（S D 2）、近世の土坑1基（S K 1）、粘土採掘坑2基（採掘坑1、2）を検出することができた。

特に、弥生時代終末～古墳時代後期を中心とした時期に一時並存して流れていた可能性の高い2つの流路（S R 7及びS R 8）内部より、様々な土器と共に貴重な木製品が出土したことは大きな成果であった。なかでもS R 7下層から出土した「組合せ式の木製品（第9図81）」、S R 8下層から出土した「農具の一部と考えられる加工材（第15図127）」、「杓子状木製品（第16図128）」、「木鍤（第16図129）」、「斎串（第16図130）」は松山平野でも類例の少ない貴重なものである。遺構の性格上、様々な時期の遺物が混ざり合うことから正確な時期を割り出すことが困難であるが、これらは新しくみても古墳時代後期に属するものである。

またS R 8は古代末の段階で、S D 3と連結させてその内部に水を送るために「流路の西岸にテラス状の段を作り出す」という改修工事が行われた可能性が高いことが判明した。S D 3は農業に伴う導水施設である可能性が最も高いと考えられるが、周辺地域において古代の集落が未だ調査されておらず、集落内に生活用水として引き込んだ可能性も捨てられない。S D 3に引き込まれた水が調査区の南西側に導かれた後、いかなる行為に利用されていたのか今後の調査に期待される。

中世後期では、主に掘立柱建物跡4棟及び溝1条を検出した。掘立柱建物は1間×2間及び1間×1間の規模が小さいものであるが、それらの主軸からほとんど同時期の建物を考えることができる。さらに、掘立柱建物は離れた位置に2棟ずつ並んだ状態で検出しており、そのことより2棟の掘立柱建物によって構成される何らかの生活（生産）単位があった可能性が高い。調査区が限られるため決して推定の域を出るものではないが、これは中世後期における農村集落の一つのパターンを示している可能性がある。

また、S D 1は掘立柱建物とほぼ同時期の遺構であるが、方向が掘立柱建物とやや異なることから、これらの小型掘立柱建物群と関係の強い構であるとは考え難い。直線的にのびる溝で、区画溝である可能性も充分に考えられるが、区画溝であるとすれば溝の西側に区画されるべき遺構が存在すると考えられる。

いずれにしても、今回の調査区で得られた所見のみでは追求することのできない問題が多く、今後の周辺隣接地域における調査成果に期待するところが大きい。今回の調査では、弥生時代、古墳時代、古代末の住居跡を検出することができなかつたが、近隣に各時代の居住域があることは確実で、今後の調査によって段階的に解明していかなければならない。

# 写真図版

## 写真図版データ

1. 遺構は、主な状況については、 $4 \times 5$ 判や $6 \times 7$ 判の白黒ネガフィルム・カラーリバーサルフィルムで撮影し、35mm判で補足している。一部の撮影には高所作業車を使用した。

使用機材：

カメラ	トヨフィールド45A	レンズ	スーパーアンギュロン 90mm他
	アサヒペンタックス67		ペンタックス67 55mm他
	ニコンニューFM2		ズームニッコール 28~85mm他
フィルム	白 黒 プラスXパン・ネオパンSS・アクロス		
	カラー エクタクロームEPP・RDPⅢ		

2. 遺物は、 $4 \times 5$ 判で撮影した。巻頭原色図版の他はすべて白黒フィルムで撮影している。

使用機材：

カメラ	トヨビューア45G
レンズ	ジンマーS 240mm F5.6他
ストロボ	コメット/C A32・C B2400
スタンド等	トヨ無影撮影台・ウェイトスタンド101
フィルム	白黒 ネオパンアクロス カラー RDPⅢ

3. 単色図版は、一部を除き、白黒プリントを専用で使用できるように焼き付けている。

使用機材：

引伸機	ラッキー450MD・90MS
レンズ	エル・ニッコール135mm F5.6A・50mm F2.8N
印画紙	イルフォードマルチグレードIV RCペーパー

4. 製版 写真図版175線

印刷	オフセット印刷
用紙	マットコート135kg

【参考】『埋文写真研究』vol.1 ~13 『報告書制作ガイド』

[大西朋子]





作業風景・S D 3にて  
(南西より)



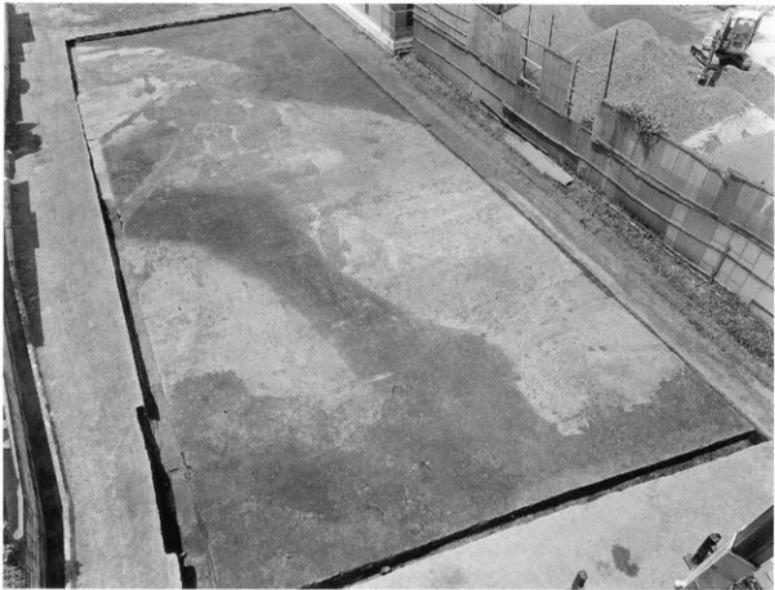
作業風景・S R 7にて  
(東より)



作業風景・S R 8にて  
(南東より)



調査地より北東を望む



遺構検出状況（東より）



S R 7 完掘状況（北東より）



S R 7 下層遺物出土状況（東より）



S R 7 遺物出土状況  
第9図83（南より）



S R 7 遺物出土状況  
第9図84ほか（南より）



S R 7 遺物出土状況  
第9図81（南より）



S R 8・S D 3検出状況（東より）



S R 8・S D 3完掘状況（東より）



S R 8 完掘状況（北より）



S R 8・S D 3 完掘状況（北東より）



S R 8 土層堆積状況（南より）



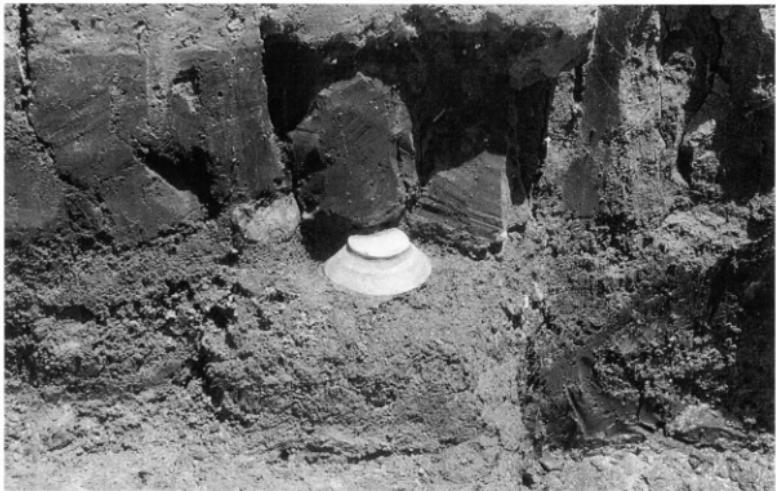
S R 8 遺物出土状況  
第16図129（北西より）



S R 8 遺物出土状況  
第13図117・第16図128  
(南西より)



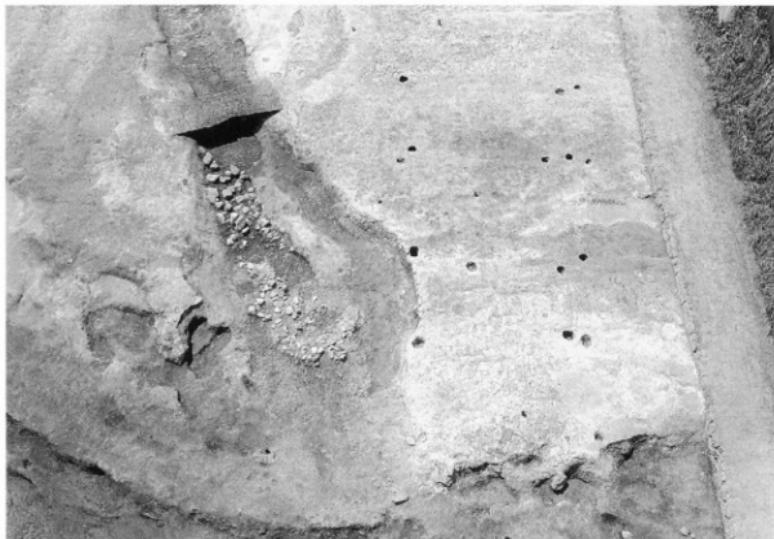
S R 8 遺物出土状況  
第16図128（南西より）



S R 8 上層遺物出土状況（南より）



掘立 1・4 棟出状況（東より）



掘立1・4完掘状況（東より）



S R 1・2・3完掘状況（南東より）

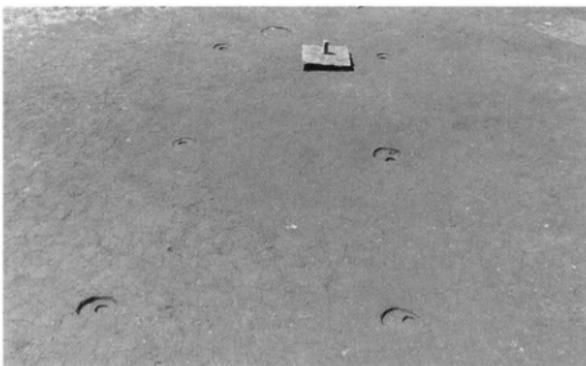
S D 1 完掘状況  
(北より)

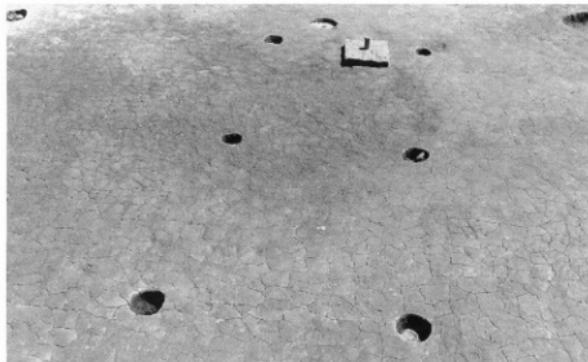


S D 1 遺物出土状況  
(南西より)



掘立 2 検出状況  
(北より)





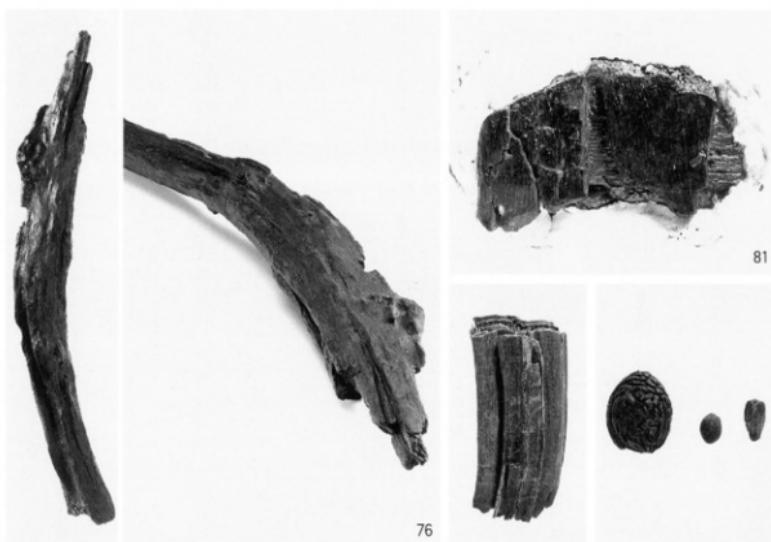
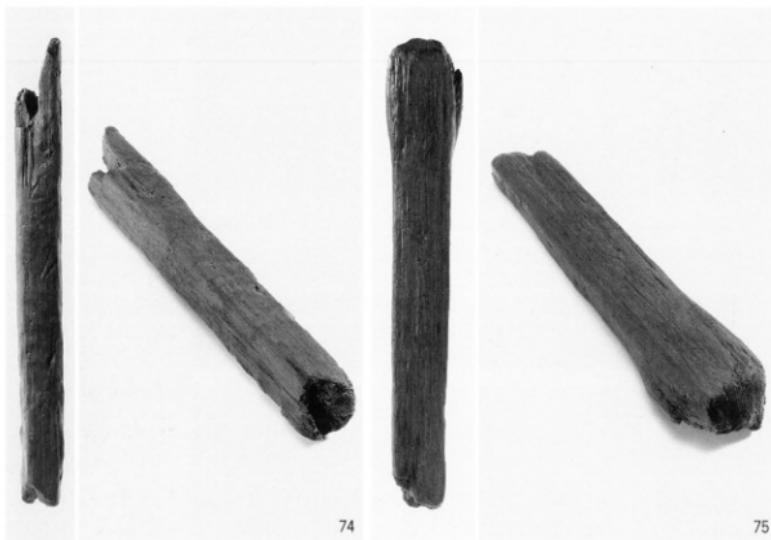
掘立 2 完掘状況  
(北より)



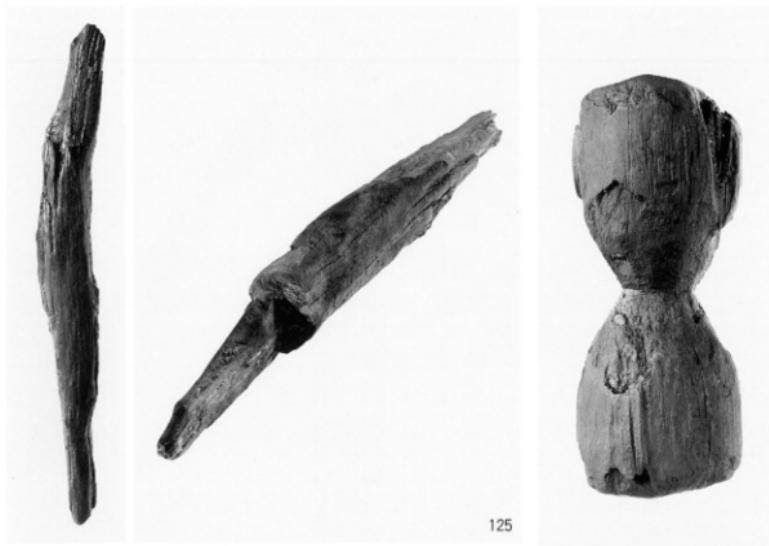
掘立 2 遺物出土状況  
S P 11 (北より)



掘立 2 遺物出土状況  
S P 13 (北より)



S R 7 出土木製品・植物遺体・獸骨



125



127

129

S R 8 出土木製品①

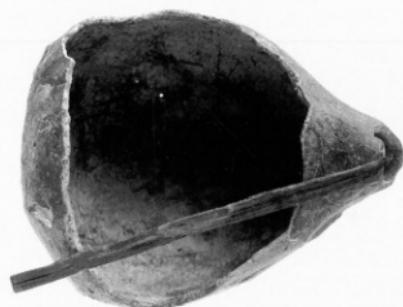


128-1



130

S R 8 出土木製品②



128-2



132

S R 8 出土木製品③・植物遺体・獸骨、S D 3 出土木製品

# 報告書抄録

ふりがな 書名	くわばらいせき5じちょうさち 桑原遺跡5次調査地						
副書名							
卷次							
シリーズ名	松山市文化財調査報告書						
シリーズ番号	第99集						
編著者名	吉岡和哉						
編集機関	松山市教育委員会・財団法人松山市生涯学習振興財團埋蔵文化財センター						
所在地	市教委:〒790-0003 松山市三番町6丁目6-1 TEL089-948-6605 埋文:〒791-8032 松山市南斎院町乙67-6 TEL089-923-6363						
発行年月日	西暦2004年3月31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯 東経	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因	
くわばらいせき 桑原遺跡 5次調査地	えひめけんまつやまし 愛媛県松山市 くわばらちょうめ 桑原5丁目	38201	33°49'44" 132°47'36"	20010406 ~ 20010831	723.40	桑原集会所 及び公園建設	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
桑原遺跡 5次調査地	集落	弥生終末 ~ 古代末	自然流路 溝	弥生土器 須恵器 木製品 土師器坏	古代末に改修した 可能性の高い、古 墳時代後期に属す る流路の最下層より 、素串・木鍤・杓 子状木製品が出土。		
	集落	中世前期	掘立柱建物跡 溝	土師器坏 羽釜	2棟ずつ並んだ状 態で計4棟検出した。		
	生産	近世	粘土探掘坑	肥前陶磁			

松山市文化財調査報告書 第99集

## 桑原遺跡5次調査地

---

---

平成16年3月31日 発行

編集 松山市教育委員会  
発行 〒790-0003 松山市三番町6丁目6-1  
TEL (089)-948-6605

財団法人松山市生涯学習振興財團  
埋蔵文化財センター  
〒791-8032 松山市南斎院町乙67番地6  
TEL (089)-923-6363

印刷 原印刷株式会社  
〒790-0056 松山市土居町396-6  
TEL (089)-974-8711

---

---

